



COLLECTION 2018

KINDAI UNIVERSITY
FACULTY OF ENGINEERING
ARCHITECTURE DESIGN

2018年度近畿大学工学部建築学科作品集

Contents 目次

Diploma Design 卒業設計

- 01 ロジリティ-路地+路地的空間から成る住宅地-
- 02 大地に潜るネットワーク
- 03 水の降る舞いのもとで-繰り返される洪水と共生する建築-
- 04 町のいえ、町のがっこう-日常を学ぶ学校建築-
- 05 生活街
- 06 現代的古都-共存する二つの居場所-
- 07 平和を創る工場-まちに残された建物と地域の更新手法-
- 08 street furniture-こどもとつくるまち-
- 09 綿花が紡ぐ町工房-KOJIMA JEANS TOWN-
- 10 みち-立体的につながる路地空間-
- 11 トキとヘンカ-忘れられた非日常-
- 12 地質時代-過去の継承と未来への警鐘-
- 13 遷宮の伝承-時と共に更新される建築-
- 14 立体重奏都市
- 15 埋まる住処-人と自然の共存方法-
- 16 浸潤する水道
- 17 蘇れ群島-旅するミニ島からなる新たなつながり-
- 18 都市的なニワ-東京計画1960からみる未来の形-
- 19 浸蝕するスケルトン-繋がれた建物たちが創り出す相補的都市-
- 20 マチ×イロドリ-商店街の第2の姿-

藤田 真奈
小林 よう
松下 七海
寺下 麻里奈
藤原 孝男
杉浦 拓哉
吉本 大樹
園生 晴菜
福本 圭祐
坪谷 知佳
臺本 亜美
増永 凌
伊藤 健太郎
藁田 直路
影山 万祐
松下 祐也
田中 航平
北山 裕貴
山下 大志
武田 美咲

03

Graduation Project 卒業制作

- 01 灯
- 02 「木組み」を生かした棚
- 03 RESIN LIGHT
- 04 kaya room divider
- 05 茅アート

水口 萌子
三木 伸也
重本 航汰
嵯峨山 亮
福重 海

25

Master's Design 修士設計

- 01 街は我が家-未完の家々から成る相互補完の暮らしの提案-
- 02 変遷する教育施設-時間と共に変化していくヒューマンスケールと教育の問題に関する研究-
- 03 他者と出会う住居-公と私の考察による交流を誘発させる中間領域の提案-
- 04 集合住宅から生まれるまち-集合住宅を核とした建築と都市の更新手法の提案-

青木 康大
笹尾 浩二
實光 周作
中村 岳史

33

Architectural Design Practice 設計演習 I, II, III

2nd Design 2年 後期建築設計演習 I

- 01 将来の自邸
- 02 コミュニティセンター

3rd Design 3年 前期建築設計演習 II

- 01 現代美術のための美術館
- 02 集合住宅

3rd Design 3年 後期建築設計演習 III

- 01 小学校
- 02 メディアセンター

集中演習 エジンバラ大学

43

Design Competition 設計コンペ

- 01 2018年度支部共通事業 日本建築学会設計競技
- 02 建築新人戦 2018
- 03 ひろしま建築学生チャレンジコンペ2018
- 04 仮囲いコンペ

53

Diploma Design 卒業設計

01	ロジリティ - 路地 + 路地的空間から成る住宅地 -	藤田 真奈	04
02	大地に潜るネットワーク	小林 よう	05
03	水の降る舞いのもとで - 繰り返される洪水と共生する建築 -	松下 七海	06
04	町のいえ、町のがっこう - 日常を学ぶ学校建築 -	寺下 麻里奈	07
05	生活街	藤原 孝男	08
06	現代的古都 - 共存する2つの居場所 -	杉浦 拓哉	09
07	平和を創る工場 - まちに残された建物と地域の更新手法 -	吉本 大樹	10
08	street furniture - こどもとつくるまち -	園生 晴菜	11
09	綿花が紡ぐ町工房 - KOJIMA JEANS TOWN -	福本 圭祐	12
10	みち - 立体的につながる路地空間 -	坪谷 知佳	13
11	トキとヘンカ - 忘れられた非日常 -	臺本 亜美	14
12	地質時代 - 過去の継承と未来への警鐘 -	増永 凌	15
13	選宮の伝承 - 時と共に更新される建築 -	伊藤 健太郎	16
14	立体重奏都市	齋田 直路	17
15	埋まる住処 - 人と自然の共存方法 -	影山 万祐	18
16	浸潤する水道	松下 祐也	19
17	蘇れ群島 - 旅するミニ島からなる新たなつながり -	田中 航平	20
18	都市的なニワ - 東京計画1960からみる未来の形 -	北山 裕貴	21
19	浸蝕するスケルトン - 繋がれた建物たちが創り出す相補的都市 -	山下 大志	22
20	マチ×イロドリ - 商店街の第2の姿 -	武田 美咲	23

ロジリティ

- 路地 + 路地的空間から成る住宅地 -

藤田 真奈
Mana FUJITA
建築意匠研究室

これからの住宅地において路地のあり方を考える。
路地はご近所付き合いをよくするためとしてコミュニティの中心となる場所である。
また、路地にはヒューマンスケールを感じられ、物理的な空間を味わえるような別世界に入り込んだ感覚になる場所である。しかしその路地が現在、消失に拍車がかかっている。路地は生活をより豊かにするための良き空間である。そのような路地の良さを残していくために、庭や住宅の内部で路地的な空間を提案する。



01. 敷地



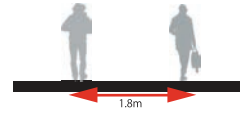
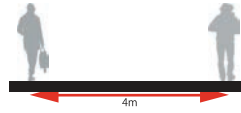
大野は古くから、越前・美濃両国を結ぶ交通の要所として栄えてきた街である。天正3年に大野の大部分を統治していた金森長近が大野城を構築するとともに、京都に似た幕府目録の城下町の建設に着手したため、大野は「北陸の小京都」と呼ばれる所となった。大野には伝統的な形式を保持している町家が多く存在しており、また古い雰囲気の良い町並みが残っているところである。



01 越前大野城
大野市北西部、大野盆地にある標高約249mの亀山に築かれた平山城である。
02 七間朝市
大野市の基盤の目玉のように、その七間朝市通りになった朝市は400年以上の歴史を誇っている。
03 寺町通り
400年以上前に町東側にお寺を集めて「寺町」を作った。南北に約20ヶ寺が並んでいる。

02. ロジリティ・ダイアグラム

■ 細い空間での人との関わり (外)



4mの道のところを歩いたら、人と人の距離が遠くご近所であっても遠すぎて声を交わすどころか挨拶すらできない可能性がある。しかし、道幅が1.8mと細い道を歩いたら、人と人の距離が近いので、あいさつをかたり、ちょっとしたことで声を交わしたりしやすくなる。これがきっかけで近所同士でのコミュニケーションがとりやすくなる。

■ 細い空間での人との関わり (内)



住宅の中で細い空間であることは、家族同士での距離感が縮まり、コミュニケーション不足等で疎遠の関係になりにくくなる。家族と距離が離れていると自分だけの領域に入るため一人で自分のことをするようにになる。しかし、距離が近いとちょっとしたことで会話が始まり、コミュニケーションのきっかけを生み出すと考える。

03. 断面図



04. 平面図 + ロジリティによる空間構成

路地が部屋と部屋の間に入り込んできて、路地が境に部屋が分かれている。

細い路地のようなモノが共通の庭になったり、その家専用の庭になる。

お風呂の底が擦りガラスになっていて、天井からお風呂の水を通して光が入る。

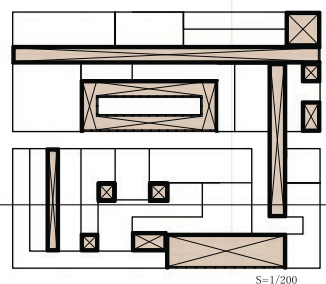
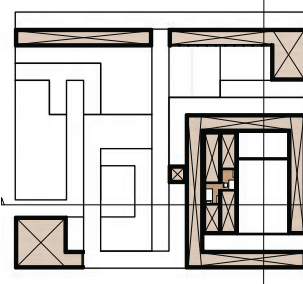
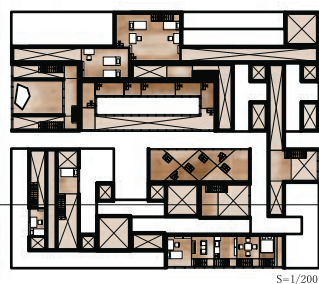
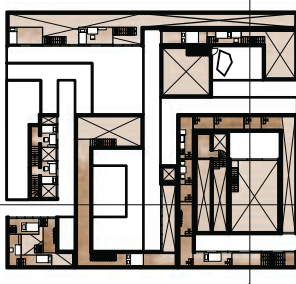
スキップフロアになっていて、視線の先は広い空間が広がっている。

長く暗い通路の先の広めの客間から光が差し込んでいて、明暗の差ができる。

路地が家の中に巻き込まれることにより家のモノが外に溢れやすくなる。

天井の高い空間で上から光が差し込んでくる。

細長く暗い路地のような空間で部屋と部屋をつないでいる。





卒業設計 優秀賞
大地に潜るネットワーク

小林 よう
 Yo KOBAYASHI
 建築意匠研究室

開発と聞くと更地に新しい建築を次々に建てていく様子を思い浮かべる。これまでも多くの場所で開発が行われ、その背景で数々の原風景が失われてきた。果たして、都市の発展のために原風景を残すことは不可能なのだろうか。もし、それが可能となればこれから都市開発に大きな影響をもたらすのではないだろうか。多くの社会問題を抱える時代に、それらを改善へと導ききっかけとなる建築を創造する。



敷地

計画地：福岡県糟屋郡中野町
 企業地区：福岡県糟屋郡
 敷地面積：約4000㎡

計画地は現在建設中の商業的拠点の敷地に位置する小さな山を中心とする。計画地の周辺は田畑の広がる自然豊かな場所であり、緑地帯がそのまま残っている。教育施設と県立運動公園の近隣にあり、北陸自動車道路の近くに隣接している。県立生野より3kmほど離れており、高層商業施設を誘引する日野川の沿河川では毎年花火大会が開催される。

背景

01. 公共交通機関利用の減少

福岡県は車や路線バスなどの交通網があまり発達していない。移動には自動車が必要不可欠であるため自家用車を持つ人が多い。自家用車を持てば交通機関を利用する必要性がなくなるため更に交通網が衰退するという負のループに陥っている。

02. 人口の減少

福岡県の人口は2000年をピークに減少傾向にあり、以降16年間連続で減少している。人口流入を試みていくつかの発展は行っているものの、大きな結果は未だ出ていない。

03. 冬の積雪

福岡県は日本気候に位置するため、いかに雪と共に生活するかが課題である。消費バンプが通ったり降雪車が故障したりと対策はしているものの温いついていないのが現状であり、交通手段の多様化や交通ダイヤの乱れなどといった問題が生じている。

04. 森林伐採

今日も世界中では急速なスピードで森林の伐採が行われている。福岡県も例外ではなく都市開発や宅地開発を理由に多くの森林が切り開かれており、緑地帯がそのまま保存されている場所は少ない。

05



卒業設計 優秀賞 / 広島平和祈念卒業設計展 2019 優秀賞

水の降る舞いのもとで

- 繰り返される洪水と共生する建築 -

松下 七海
Nanami MATSUSHITA
建築意匠研究室

堤防というインフラに人が活動する空間を加えることで土木と建築の新たな可能性を提案する。明治時代から多くの大洪水の歴史をもつ福知山はこれまで舟艇配備やダム建設などの対策を打ち、生き続けてきた。最近では二、三年に一度のペースで浸水被害が出ており、避難場所に指定されている場所まで浸水している。そこで洪水を少しでも軽減できるような建築面からの対策ができないだろうか考えた。治水対策のオルタナティブとして水辺があふれる新たな建築について考える。水害を受け、そして乗り越え、それでもそこに住み続けたいと思う人たちのための、時代を越えて共に生きていく建築として存在していくことを期待する。



01 敷地

計画地は京都府北部に位置する福知山市の洪水氾濫原である由良川にかかる音無瀬橋の堤防周辺とする。

明治時代から幾度と浸水し、最近では1.2年に1度のペースで被害にあっている。水害常習地域である福知山は対策をたられてきたように感じるが、土壌ステーションやダム、ポンプ場など土木的対策や浸水したあとの対処・対策が主である。建築的な対策はほとんどなされてきていない。

02 プログラム

半地下に食料加工場（備蓄、加工）、1.2階に住戸、食の販売所（店舗）、パブリックスペース（時には避難できる場所）が点在した多重堤防建築を提案する。目的地へのショートカットや水景の回避ができる。

水景と共生する多重堤防建築

地域ネットワーク

住民 文化伝承

「食」の業者 食の売買 観光客

03 水位変化

雨水の関係から4段階のレベルを操作し、水を受け入れ日常化した新しい河川との暮らし方を提案する。

X-X' 断面 Y-Y' 断面

既存堤防高さ：川底から12m。堤防から伸びる通路、避難所の高さと同じフロアレベル。

大雨（過去最高）高さ：川底から8.5m。住宅2階部分の高さと同じフロアレベル。

雨季（3.6.9月）：土手から-0.5m。低いテラスと同じフロアレベル。

平均水位：土手から-1m。全てのボリュームはこのレベルよりも高い場所に位置する。

04 詳細平面図

05 メインプラン

段階的に水位変化を受け入れる街と河川の新しい共生作法を提案する。

1. 水制

周辺街路から通路を抽出。幾つかテラスを川に向けて伸ばす。街と河川を結び、吹き抜ける通路や、スラブが伸び出したテラスは街と人と河川とを結びつける媒介として働きを持つ。

2. 減衰

食の加工場を地下に入れる。階段を川側に作ったり、堤防に向かって少しずつフロアレベルを上げていく。そうして川の水が街側へ流れることを防ぐ。食産加工の備蓄・加工・販売を一体化する。

3. 消波

川から既存堤防に向かって複数のヴォイドのある1枚壁を設ける。1列に複数設けることで水が反射し、力が分散することで、波の勢いを少なくする。消波壁によって軽く空間が仕切られる。

4. 遊水

洪水時に川の水が住宅側に流れそうになる前に水が落ち、街に溢れることを防ぐ。普段は静かに川が流れ、通りかかった人々が様子を見たり、子どもたちが集まり遊ぶ場となったりする。

06 断面図

06 断面図



卒業設計 優秀賞

町のいえ、町のがっこう

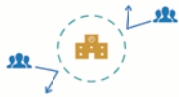
- 日常を学ぶ学校建築 -

寺下 麻里奈
Marina TERASHITA
建築意匠研究室

現代の学校は街の中で孤立し、大人たちが気軽に立ち入れる場所ではない。同時に子供たちは決められた環境で決められたことを学び、学校と社会は区別されるのが一般的である。本計画では、複合施設（小中一貫校、図書館、老人デイサービスセンター、シェアオフィス、ジムなどを含む）を提案する。また、通常の学校のような避難所や防災備蓄倉庫としての役割だけでなく、より豊かな機能を含む「地域の施設としての学校」を計画する。

01 現代社会における学校の孤立化

現代社会における学校は地域から孤立し、大人が気軽に立ち入れる場所ではない。同時に子供たちは決められた環境で決められたことを学習し、学校と社会は区別されるのが一般的である。



02 小中一貫校・義務教育学校の制度化

「義務教育学校」と呼ばれるような、小中一貫が全国で導入され、少子化の進行とともに、教育の形態は時代とともに変化し続けている。学年の区切りが自由化されているため、必ずしも今までの6・3年という形にはならず、教育内容も9年という期間で構成される。これからの社会において小中一貫教育形式は当たり前ものとなっていくだろう。



03 体験型学習施設

「生涯学習」という言葉がある。学校として決められたことを学ぶだけではなく、複合された地域の施設とのつながりによって学んでいく、「体験型」学習施設を計画する。なお、スポーツジム、オフィス、図書館、映画館、老人デイサービス、アートミュージアムなど複数のアクティビティを学校に取り入れ複合する。



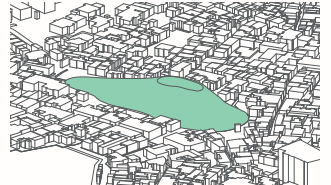
04 交わる動線

観光客は海沿いに多く集まる。町中を歩くようになる。住民の動線と積極的に関わり合う。



05 子供の居場所であり大人の居場所でもある

小さな町に計画するこの学校は町の中心、シンボルになる。子供たちは決められた教室に留まらず、町に対して積極的になる。また、住民の生活に学校の時間の流れがじわじわと重なっていくことにより、学校はみんなの居場所になり、町はみんなの学校になる。

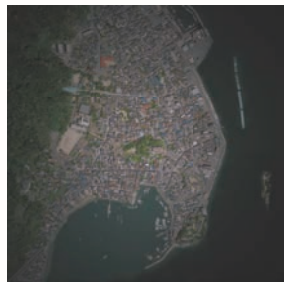


06 見えるエデュケーション

閉じた人間関係はヒエラルキーを作ってしまう。教室に支配された空間や先生に支配された空間ではなくオープンな空間で、先生同士、生徒同士でお互いの関係がよく見える。ほかの先生が見ている、ほかの子供も見ているような状況では先生も生徒も学校に対してよりアクティブになっていくのではないだろうか。



08 長い歴史の中で育まれたコミュニティ



・敷地情報 / Site information

計画敷地 | 広島県福山市新町
用途地域 | 商業地域
建 蔽 率 | 80%
容 積 率 | 500%
防火・準防火地域 | 防火地域

・広島県福山市新町

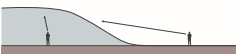
計画地は、広島県福山市新町の浦歴史民俗資料館を中心とし、新町全体を視野に入れる。新町は人口約4000人の小さな町である。福山市内からは車やバスで、尾道市からはフェリーでアクセス可能な町である。新町の海沿いは特に観光地として近年来訪者数も増えており、江戸時代から残る古い町並みや、海浜施設などが魅力的である。海外からの観光客も多く、海沿いには宿泊施設が立ちならんでいる。町には住民同士独自のコミュニティがあり、町のイベントやお祭りなどは特に大切にされている。また、人口減少、高齢化、過疎化、歴史的建造物老朽化など問題を多く抱える街でもある。街の小学校は生徒数約120人、中学校は約40人で現在は別々に存在しているが、2019年には福山市初の施設一体型小中一貫校「新の浦学園」が開校予定で、新町内に限らず、福山市内のどこからでも通える学校になる。

・新の浦歴史民俗資料館

中心として設定した新の浦歴史民俗資料館は、街から20メートルほど上がった丘の上に位置しており、新の浦の街全体を見渡せるロケーションが魅力である。

07 見えるというセキュリティ

丘という地形を利用して、オープンな空間と小さな町のコミュニティにより、町の人に守られるセキュリティが成り立つ。

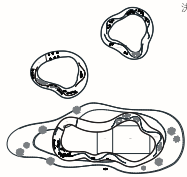


09 空間の仕切り方

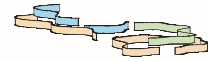
教室の入り口や教室間の閉じる壁は作らず、細長いボリュームの中には曲線壁を設ける。



教室同士が隣り合わせ
自由度が低い



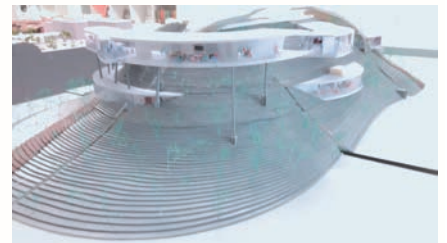
教室同士を離して配置
教室間の動線は自由度が高い
決められた大きさの教室 決められた教室



教室間の動線に沿って曲線壁をつくる
その影り部分に自然と空間が生まれる
細くなったり太くなったりする空間の変化によってできる細い部分は感覚的に教室同士の中間的空間になる

10 形態

町をまとめる存在・シンボル性を持つ建築形態かつ山のうねりやランドスケープになじむ造形が、子供たちの居場所として町みんなの学校として求められるのではないかと考えた。山に対して巻き付きのめり込んでいくような造形タイプをもとに設計した。なお、ブロック模型を用いたゾーニングにおいて、曲線壁による中間的空間を考慮しながら7m×7mをひとつのブロック単位とし計画した。

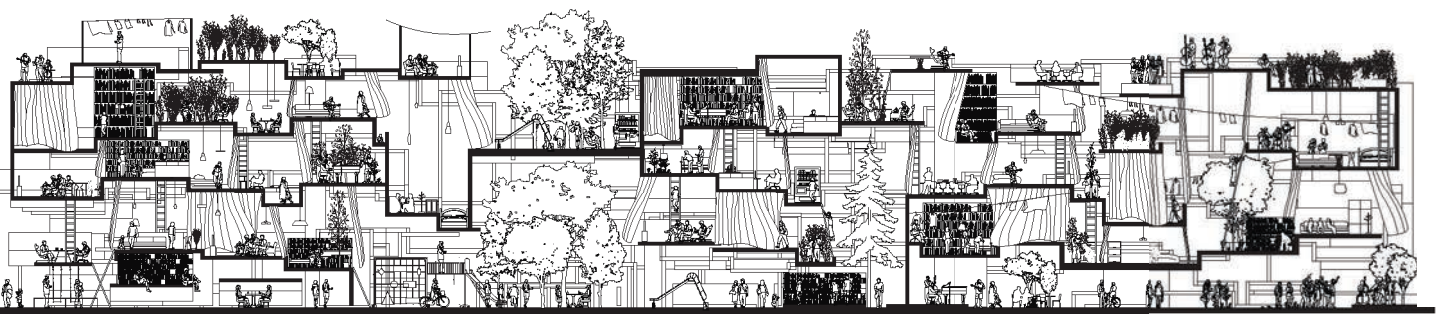
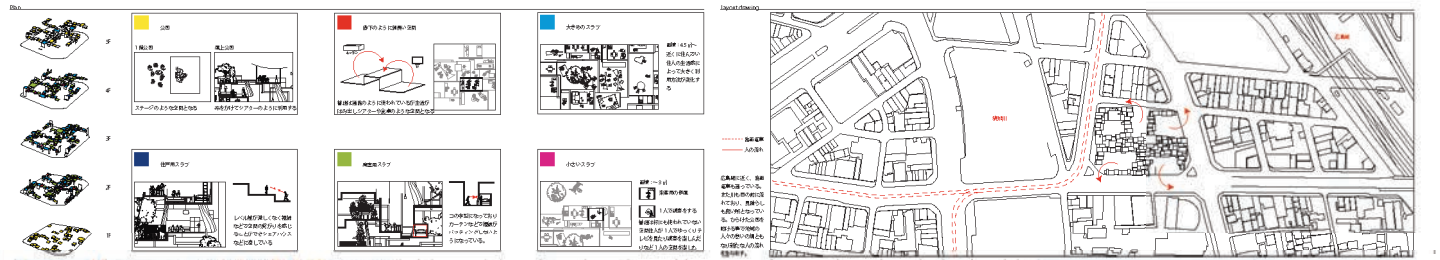
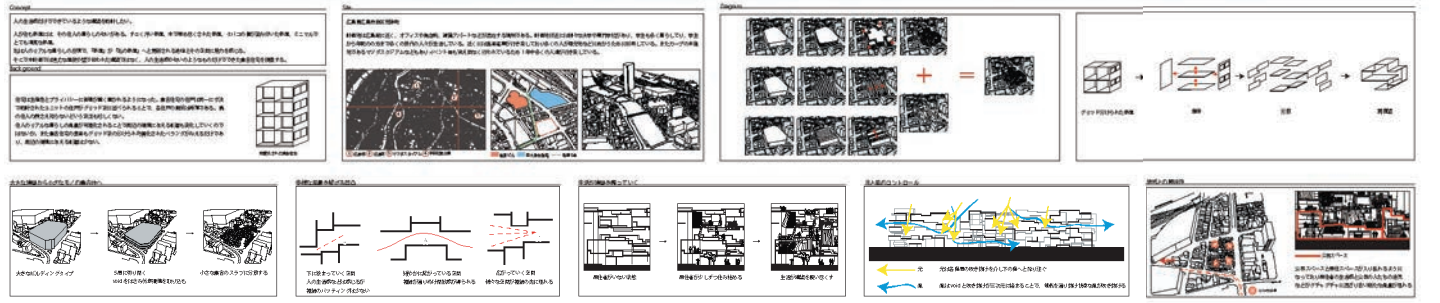




広島平和祈念卒業設計展2019 優秀賞・西田司賞
生活街

藤原 孝男
Takao FUJIHARA
建築意匠研究室

広島を中心、広島駅近くの巨大な街のような建築。
生活が溢れていき、やがて建築が消えてしまう。
人それぞれがもっている「生活感」だけでできているような建築。





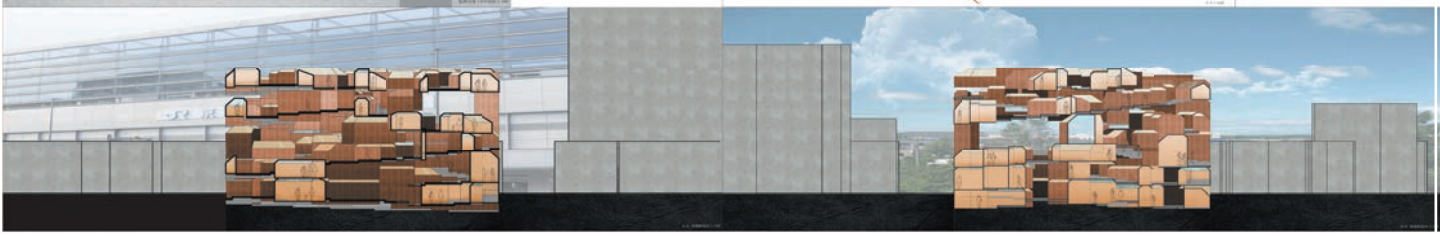
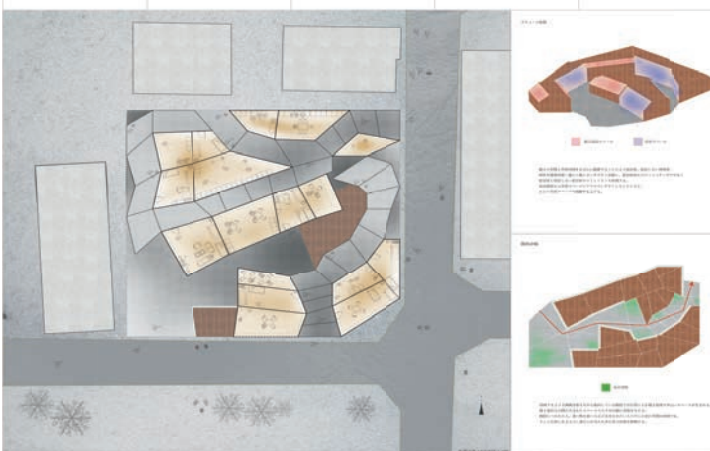
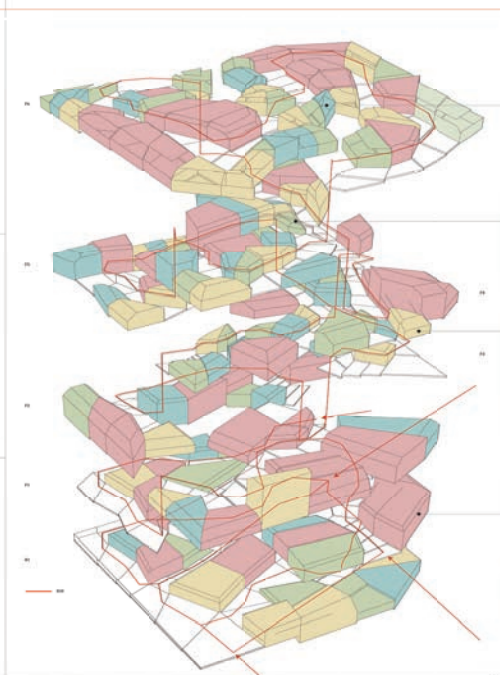
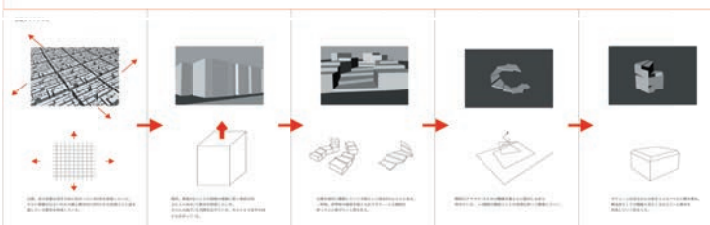
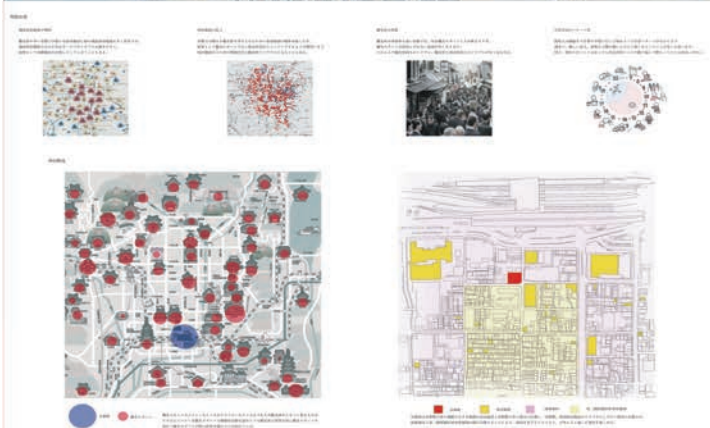
広島平和祈念卒業設計展 2019 優秀賞

現代的古都

- 共存する二つの居場所 -

杉浦 拓哉
Takuya SUGIURA
建築意匠研究室

本計画では京都駅の建設により南北で差別が起こってしまった観光都市京都で、観光都市として京都が抱える問題、現代人が抱える問題を取り上げ、両者のサードプレイスを共存させることで現代宿泊施設の解体と再構築により、それぞれで完結していたコミュニティを交わらせ、新たなコミュニティを生み、観光客と地元住民のトラブルを妨げ、観光都市としての問題も解決する。さらに、ボリュームをプライベートとコモンに分けコモンの中で京都の文化を表現しコミュニティを形成していく。そして昔と今の都市の成り立ちを織り交ぜ構築していく。





広島平和祈念卒業設計展2019 優秀賞・今川忠男賞

平和を創る工場

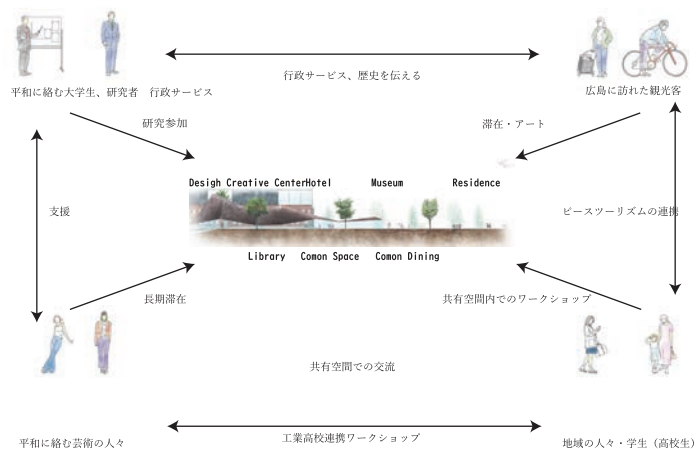
- まちに残された建物と地域の更新手法 -

吉本 大樹
Daiki YOSHIMOTO
建築意匠研究室

本計画では「まち」に残された被爆建物とそれをとりまく地域の更新手法を提案する。広島市の被爆建物の多く二つに分けられており、立派なものはそのまま保存されるか、取り壊されてモニュメント化されており、どちらも庶民に届かないように残されている。建物は使われてこそ意味があるのでないだろうか。この廃墟を当時の歴史性を維持しながら伝統と創造を融合させ、歴史的記念物に生命の息吹を取り戻したい。建物が更新されることで建物をとりまく地域及び広島が更新されていく手法を提案する。



Relationship between architecture & region - 建物と地域の交り方 -



Program -4つの既存と新築、5つの機能-

被爆廠と高校の境界線に新築を作り5つの棟をもつクリエイティブな平和を創る工場を再生させる。宿泊施設、美術施設、研究施設、アーティストレジデンス、公共施設を合わせたクリエイティブセンターへと計画する。





street furniture

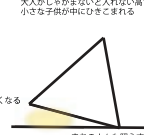
- こどもとつくるまち -

園生 晴菜
Haruna SONOU
建築意匠研究室

本計画では、まちの存在する隙間の余白に、子供の遊び場となる建築を提案する。子供にとって「遊び」とは生きることそのものである。遊びながら多くのことを学び、成長してゆく。子供の笑顔がまち全体にあかりを灯す。子供たちの無邪気で活発な遊びの風景がまちの顔となることはできないかと考えた。そこで玩具のように、子供たちに使われ、子供たちの無邪気な笑顔がまちの余白を縫っていく建築を提案する。



Scene Floor plan S=1/50 Sectional view S=1/50 Map



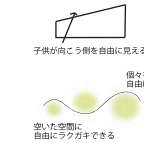
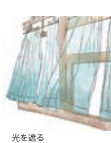
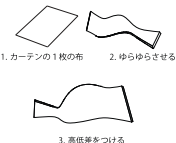
大人がしゃがまないと入れない高さ
小さな子供が中にひきこまれる

あかりを灯す
電球をのぞきたくする

つけたり消したりを繰り返して遊ぶ

まちの人々も自ら建築となる

2.Watch - ガラリー -



1. カーテンの1枚の布 2. ゆらゆらさせる

3. 高低差をつける

カーテンの裏に隠れて遊んだ

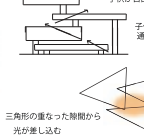
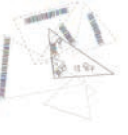
光を通る
ガラスパネルを守る
ふわふわ

子供が向こう側を自由に見える

壁を必要とする
自由に壁を断る

空いた空間に
自由にラックが利用できる

3.Read - 図書館 -



1. 机を分解する 2. スケールアップさせて積み上げる

3. 隙間に新しい空間ができる

毎日ここで勉強した

宿題をした机

子供が自由によしのぼる

子供だけが
読める高さ

三角形を重ねた隙間から
光が差し込む

4.Smell - 植物園 -



1. 1つの花瓶 2. わける(花瓶が割れたイメージ)

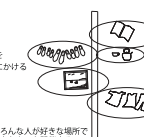
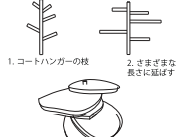
3. 高低差をつける

お花に水をあげるのが好き

カーブに入りが引き込まれていく
自分の好きな花を自由に育てる

自分の好きな花を生ける
色・形・種類がたくさんある
水

5.Choose - フリーマーケット -



1. コートハンガーの柱 2. さまざまな長さに延ばす

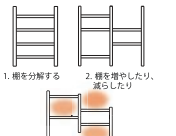
3. 柱をスケールアップさせて空間をつくる

おままごと・お化粧ごっこ

服・かばん・帽子を
好きな場所に自由にかける

いろんな人が好きな場所で
好きなものを陳列する

7.Think - 児童館 -



1. 棚を分解する 2. 棚を寄せたり、離したり

3. 上下にずらすして空間をつくる

たくさんのお気に入りの絵本
本がいっぱい
知識がいっぱい

視線の操作
子供+大人 子供+大人 子供+子供

棚の操作
床になる 家具になる 空間になる

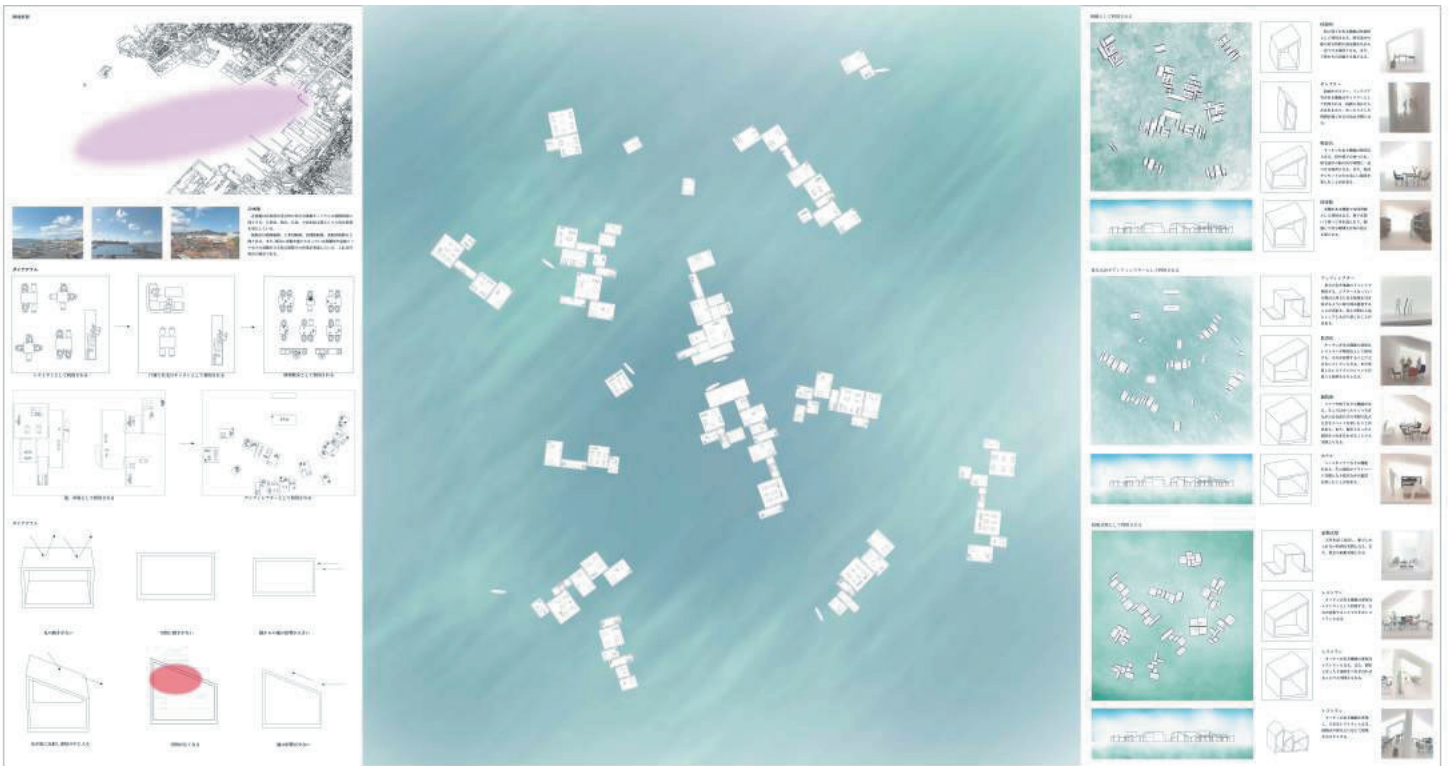
たくさんの好きな絵本



トキとヘンカ - 忘れられた非日常 -

臺本 亜美
Tsugumi DAIMOTO
建築意匠研究室

呉湾は海との関わりが希薄でなかなか行くことがないように感じられる。よって海と陸を繋げる場所、港の棧橋と共に海に広がる空間を提案する。呉市は造船と共に海との歴史を築き上げてきた。また呉の生活と海との格差から生まれるギャップがこの建築が完成することでこれからの生活スタイルの楽しみ方が生まれ、地域特有の呉市という色が出るのではないだろうか。また、住民にとって「海の世界に広がる建築」という従来の建築とは異なる、アナザーワールドのような建築が出来ることを期待する。





遷宮の伝承 - 時と共に更新される建築 -

伊藤 健太郎
Kentaro ITO
建築意匠研究室

本計画では式年遷宮後壊された伊勢神宮の使用部材であるヒノキを使用し生涯体験できることのない伊勢神宮という壮大であり神聖な空間を体験できる場を提案する。およそ1300年にわたり行われてきた式年遷宮だがその式年遷宮を執り行うのに8年前から準備をし約46万人の人が携わる。一回の遷宮においては、樹齢200年以上のヒノキ材が一万本以上が用いられている。だが、実際式年遷宮の際に解体される旧殿に使用された部材は、全国の神宮の造営等に再利用される。そうではなく、伊勢のための用材を伊勢の地で利用しようと考えた。



遷宮の伝承 - 時と共に更新される建築 -

敷地

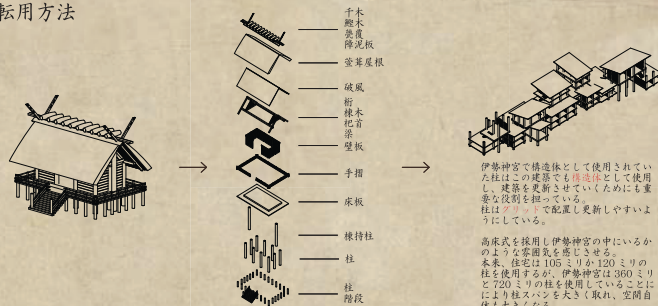


伊勢神宮

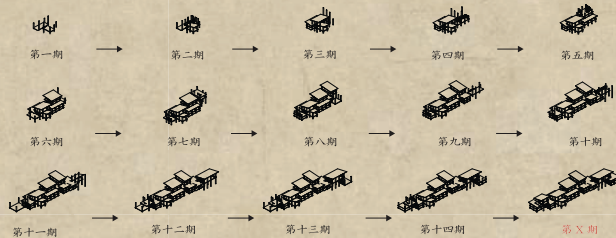


計画地は三重県伊勢市宇治館町伊勢神宮の五十鈴川御手洗場の対岸とする。五十鈴川沿いにおかげ横丁という横丁跡があり伊勢神宮を参拝に訪れた人びとがおかげ横丁を通り伊勢神宮を参拝する。川沿いは、観光客は川を見ながら食べ物を食べたりついでに、地域の子供たちは水遊びをしていて地域と観光客が関わり合いをみせ、賑わいを見ている。五十鈴川御手洗場では参拝に来た人たちが手と口をすすいで心身を清めている。対岸は伊勢神宮を建てるために育てられている密蔵林になっていて、そこが計画地である。

転用方法



設計手法





立体重奏都市

梶田 直路
Naomichi NATSUMEDA
建築意匠研究室

本計画では長期にわたり開発が進められている中之島を結節点として一極集中させる開発を行い、建築都市を生活複合体とすることで都市と人の新たな関係性を提示する。国際的な地位の低下。緑の喪失。過酷な通勤。均質化した風景。孤立化したライフサイクル。都市が抱える様々な問題の背景には工業化社会を前提とした職、住を分離する都市構造が知識情報社会のライフスタイルに適合しきれていないことが考えられる。細分化され、離散的に拡散した都市機能を集約し垂直方向に構築していく建築は都市に活力を与え、これからの都市における建築の在り方を示す。

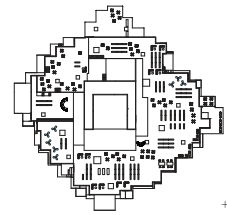
都市構造の転換



同心円上に市街地拡大し、都市機能が飽和した都市が形成され職住分離が確立される。その結果、様々な都市問題が生じ、都市と人の関係性が希薄化した都市が形成される。



多核的に都市が拡散していき、街は立体的に構築されていく。職住近接の暮らしが生まれ、都市と都市の間には緑が溢れ、都市と人の関係性に変化をもたらす。



Outer Space / 外部空間

大阪都市部での低中密度、広場は少なく緑に触れ合うことが少ない。住む人、働く人、訪れる人のアクティビティが外部へと向かうことで都市に活力を与える。

Gap / スラブのずれ

スラブがずれるながら立体的に構築されることで上下に区切られていた空間に変化が付き立体的な空間の豊かさをもたらす。

Surface / 表面積

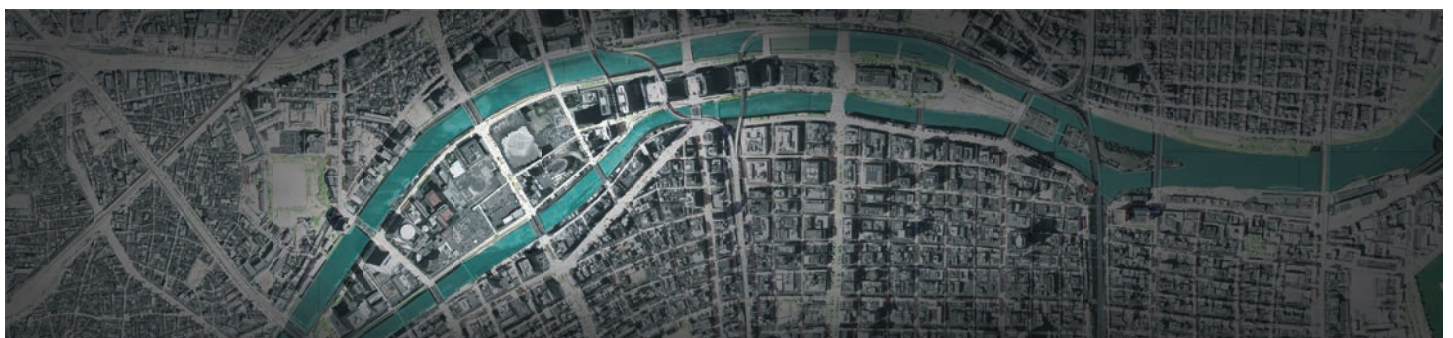
樹木のように受光面を最大化し表面積を多くすることで採光や風通しを十分に確保できる。

Core / コア構造

高層建物の近郊ある中央のコアを分散化させ平面全体に分散させ内部空間を曖昧に分割させることで、均一なフロアに変化を生かす出す

Update / 更新

人口減少、高齢化など様々な問題を抱える都市の将来を的確に予想することは難しい。都市を更新し続けるシステムを構築することで持続可能な都市環境を形成する。





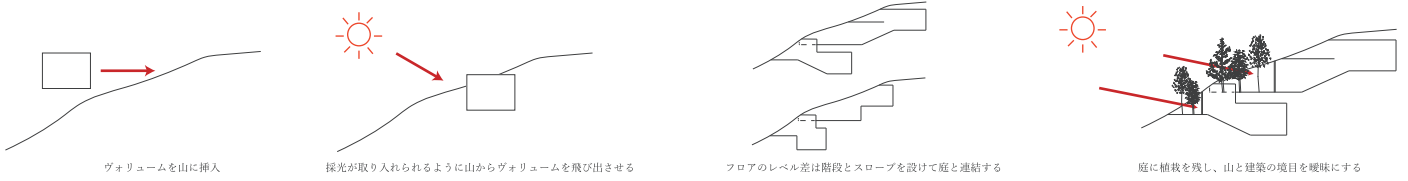
埋まる住処 - 人と自然の共存方法 -

影山 万祐
Mayu KAGEYAMA
建築意匠研究室

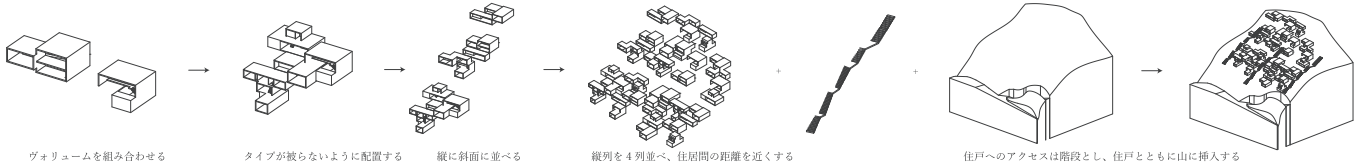
現在、広島市では年々人口が増加し続けており、西区も同様である。人口増加によって広島市内には住宅も増加し続ける。また、広島中心部の土地は建築物が飽和状態に近く、住宅は郊外へと侵出を始めている。低層住宅では大勢の人が居住することができないことから高層住宅が建築され景観が損なわれている。本計画ではそのような人口・住宅増加に伴う中心部からの郊外浸食による緑地減少の懸念、平地確保のために山を切り崩し、自然破壊を繰り返している現在に対して、住宅増加できる方法を考える。



diagram 1. day lighting and garden



2.combination



unit type

<p>type A</p> <p>夫婦向け。二階から中二階のアクセスが近いので、寝る際も緑を感じられる。</p>	<p>type B</p> <p>家族・夫婦向け。庭部分は屋根があるので雨の日も安心して外に出られる。</p>	<p>type C</p> <p>単身向け。キッチン部分を広くとっているため料理好きさんにオススメ。</p>	<p>type D</p> <p>家族向け。中二階と中三階を設けて子供たちがフロア差を選びとして感じられる空間を目指した。</p>	<p>type E</p> <p>単身向け。階段階段で空間にデザインをつけ、さらに空間は自由に変えられるよ仕切りはない。</p>	<p>type F</p> <p>家族向け。二階の風呂から外の景色を眺めながらのんびり。</p>	<p>type G</p> <p>単身向け。縦長大開口で部屋と外の繋がりを感じさせない。</p>	<p>type H</p> <p>家族向け。各階層から外の景色を直視感じられる。また、リビング階段により家族交流がたくましくできる。</p>	<p>type I</p> <p>夫婦向け。スロープなどで中二階を設けてゆとりとした空間とした。</p>	<p>type J</p> <p>単身向け住戸。部屋ごとにレベル差が変わる。</p>
--	---	--	---	--	--	--	--	--	--





浸潤する水道

松下 祐也
Yuya MATSUSHITA
歴史意匠研究室

尾道と尾道水道を挟んで対岸に位置する向島。古くから尾道とは密接な関係性があるが、その魅力は知られていない。そこで尾道市役所を補完する施設を設計する。庁舎という固定概念にとらわれず尾道と向島の関係性を高めることのできる機能を盛り込み、人々の交流を生む場をつくることで水道への関係性の浸潤を狙う。その各機能は災害に対応し、防災拠点となる。



Plan

Site

Concept

Architectural Diagram

Ann Diagram

Diagrams and Outdoor Detail

Section

Section

Section

Section

Legend

- 1 Café
- 2 Civic Classroom
- 3 Shelter Room
- 4 Book room
- 5 General Affairs Section
- 6 Meeting room
- 7 Resident Union
- 8 Museum
- 9 Classroom
- 10 Shop
- 11 Park
- 12 Shop
- 13 Hall



蘇れ群島

- 旅するミニ島からなる新たなつながり -

田中 航平
Kohei TANAKA
都市歴史研究室

瀬戸内海は、古くから政治・経済・文化の中心地である京都や大阪と中国、四国、九州各地を結ぶ重要な内海だった。「海の道」として、経済発展に不可欠な内航・外交ルートとともに、その周辺地域は活況を呈していた。しかし、舟運の衰退が進む今日、瀬戸内海を中心としたつながりが薄れている。この静かで豊かな交流の海は近代以降、政治的には隔離され、分断され、工業開発や海砂利採取等による海のやせ細りなど地球環境上の衰退をも余儀なくされた。そして、世界のグローバル化・効率化・均質化の流れが島の固有性を少しずつなくしていく中で、島々の人口は減少し、高齢化が進み、地域の活力を低下させてきたのである。そこで、瀬戸内海を中心とした地域の「つながり」を再構築し、各島々を豊かにする仕組みを試みる。

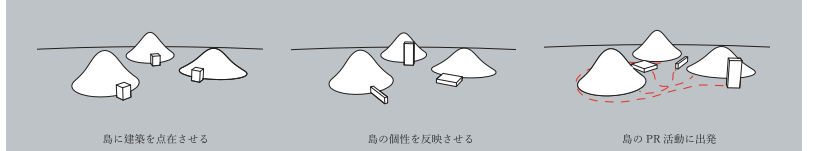


02. Site Information | 敷地情報

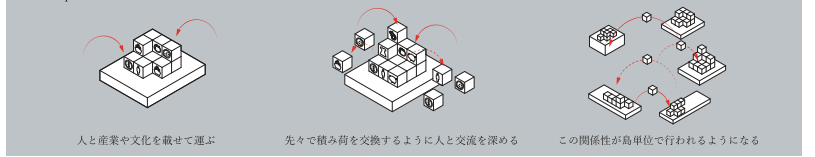
瀬戸内海における上島町
上島町は、半径200キロメートルで神戸市と下関市を結ぶ瀬戸内海のほぼ中央に位置する。愛媛県の東北部、広島県境に浮かぶ6つの有人島と、19の無人島から構成される離島の町である。有人島である「弓削島」「生名島」「岩城島」「佐島」「高井神島」「魚島」は、瀬戸内海の中心に浮かぶ雲予諸島のすぐそばに位置するが、本土や四国と道路で接続されていない。古くは、製塩業(塩田)の歴史を有し、中央の権門勢家が上島の島々を荘園化した。その後、農業・漁業・造船業が主産業となり、発達を遂げた。



03. Concept | ミニ島を介したつながり



04. Concept | 海を介したつながり



YUGESHIMA | 1. Design Process | 製塩過程の応用

普遍的な立方体のヴォリューム
過剰であった塩田の面積である2町歩の約990㎡を確保する
海水運びと垂直を考慮し断面を決定する
垂直を組み立てたときの全体ヴォリューム

2. Program | 塩田の動き

海水運び・湖敷き
幹の乾燥・塩田の移動
着岸・高築き
かん水もろ過

IKINAJIMA | 1. Design Process | 海面の利用

普遍的な立方体のヴォリューム
押しつぶして前にすれば海に浮かぶかも
一気に伸ばして一気に海へ
足を踏み入れるために緩やかに1.1m下げ厚みを均たせる

2. Program | 広場の詳細

100mmの海
境界のない緩やかな場所
海から+1000mmの場所

この建築は、どこにでも場をつくり出す。例えば、砂のない街だつて、海さえあればそこを水辺へと変えてみることが出来る。最も分厚い場所は2000mmの厚さを持つ。逆に最も薄い場所では900mmしかない。さらにここから、水中に沈んでしまう部分を考慮すると、海面からの高さは1000mmと100mmである。海に向かって歩いていくと、気が付かないうちに足音が水につかっているような、薄く海が広がっている空間。

IWAGIJIMA | 1. Design Process | 動く果樹園

普遍的な立方体のヴォリューム
斜面地を形成するための長く高いヴォリュームになる
縦木を用いてアクセスをとりやすくする
建築全体を斜め斜面地を形成する

2. Program | 果樹園の動き

果樹園は季節により彩を変化させる。海に浮かぶ農園は常に目前に向き合う開けた瀬戸内海で、太陽の恵みをいっぱい受ける農園は、行く先々で、果実の良い香りが人々に癒しをもたらす。瀬戸内海の相模原は、少しずつ旬がずれているため長期間にわたり活動を続ける。

SASHIMA | 1. Design Process | 動く農園

普遍的な立方体のヴォリューム
過剰であった塩田の面積である2町歩の約990㎡を確保する
海水運びと垂直を考慮し断面を決定する
垂直を組み立てたときの全体ヴォリューム

2. Program | 農園の動き

春のゾーン
夏のゾーン
秋のゾーン
冬のゾーン

TAKAIKAMISHIMA | 1. Design Process | 溶け込み、際立つ

普遍的な立方体のヴォリューム
民家に馴染むような組織形態とする
壁厚を可能な限り薄くしエッジを消す
そこにあるのかもしれないが遠くからは馴染み近くでは存在感を放つ

2. Program | 島で唯一の神島商店

高井神島
唯一の商店建築

上島町の特徴・上島町のさまざまなものが唯一ここに集まってくる
魅力のPR・情報の発信源などの役割になっていく

UOSHIMA | 1. Design Process | 海を切り取る

普遍的な立方体のヴォリューム
縦長く海に伸びる形態
少しずつ海の中に入っていく
白い壁が水面に浮いたような形態となる

2. Program | 水族館

明から暗へ
動から静へ

自分だけの水族館のような空間が目の前に伸びていく。細い空間を遠くまでいくと少しずつ、海の中に入っていくことを実感する。明るく空間から、徐々に暗い空間へ移行していく。最後に見れるのは一面見渡せる水族館だ。日常の動的空間から静的空間へ。



都市的なニワ

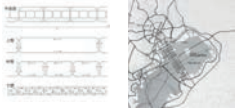
- 東京計画 1960 からみる未来の形 -

北山 裕貴
Yuki KITAYAMA
構造工学研究室

50年後、100年後の未来はどんな姿なのか。人は、住宅は、そして都市は形をどのように変化させていくのか、それとも今のままなのか。
建築家丹下健三が想像した住宅、交通、都市の形は当時は現実的でなかったが、今の技術ならそうとも言えない。そこで、丹下健三が構想した東京の水上都市を参考に、新しい集合住宅の提案をする。そこには海外から来た労働者が住み、新しいコミュニティを形成していく。それに伴い日本の労働力不足の改善の手助けとなる。
大阪なにわの大阪湾に人々が集まってコミュニティを作り、暮らす庭のような場所の提案。

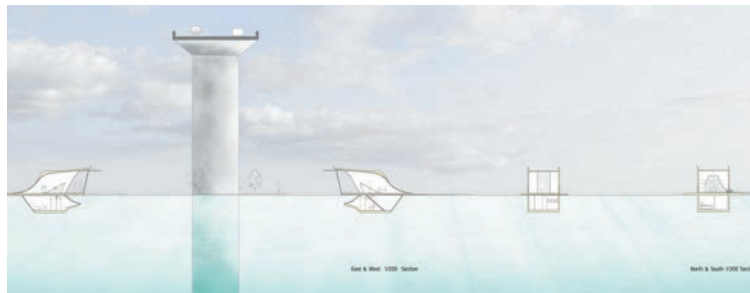
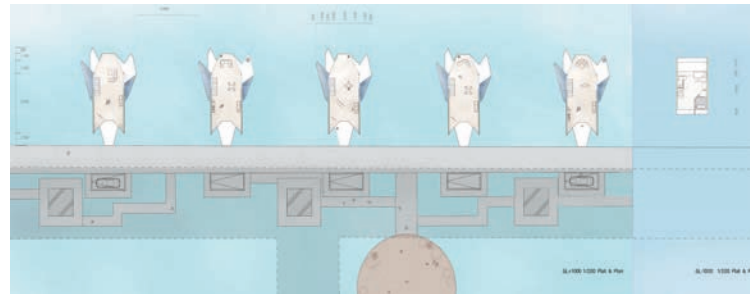
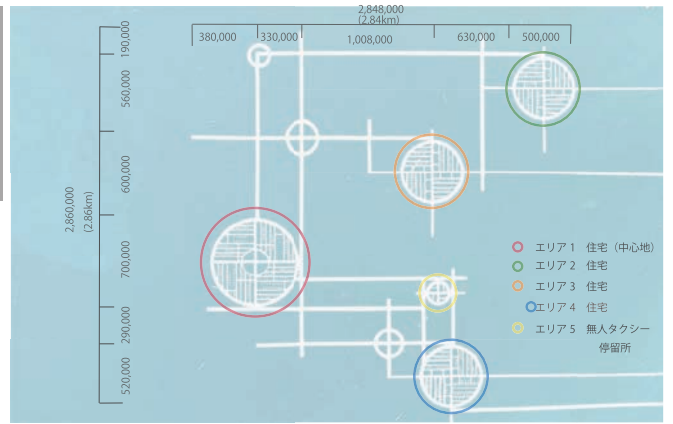
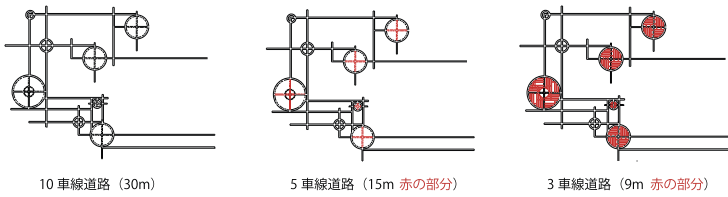
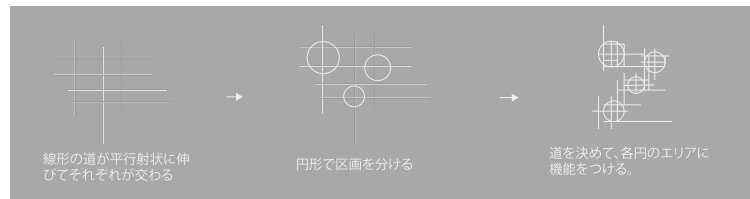
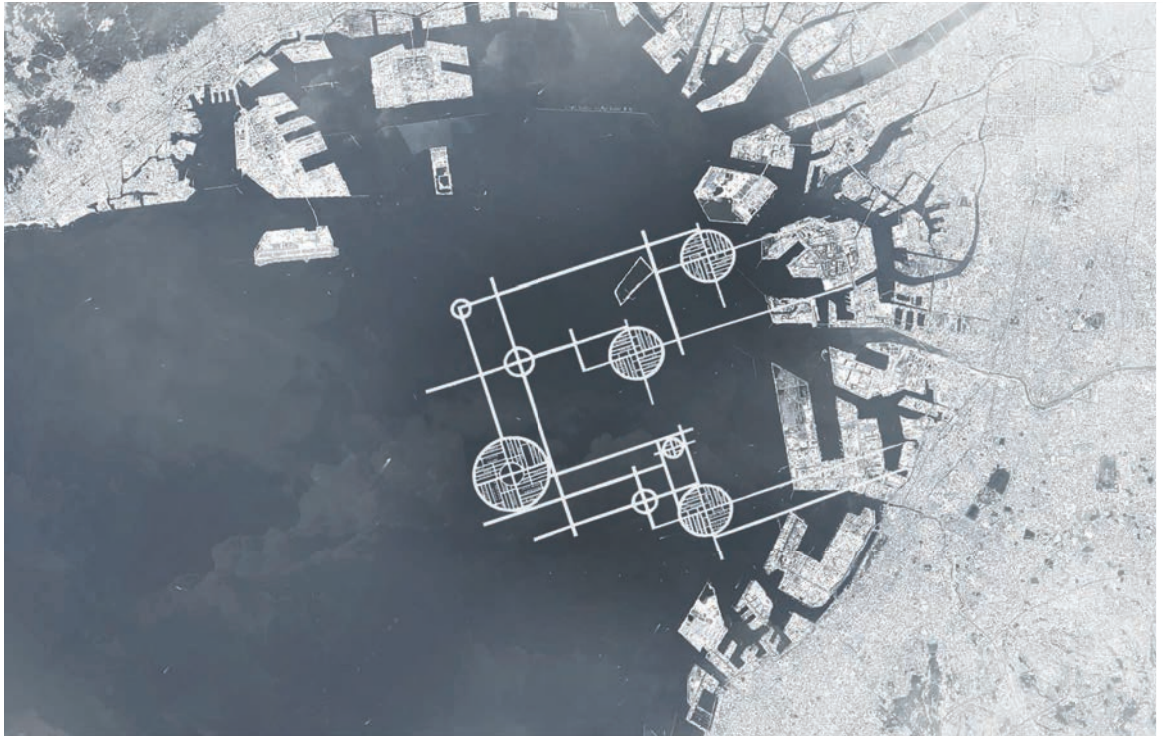
サイクル・トランス・ポーターション

東京計画 1960 の中でアイデアとして取り入れられているもので建築家、黒川紀章の都市と建築とを有機的に統合する新たな交通システムの事である。3層構造からなる立体的な箱状交通で、道路は完全自動走行車が走る 10 車線道路になっており、速度によって層が分けられている。事故の防止を促すものである。また、その3層の道路とは別で歩行者の道路が設けられ歩車分離がなされている。



海上都市

構想は 1980 年代からあり、実現はしていない。日本は台風や地震による津波等から議論の対象になっていない。人口島を土地として東京湾上に建て人口過多、住宅問題への新たな打開策として出されている。



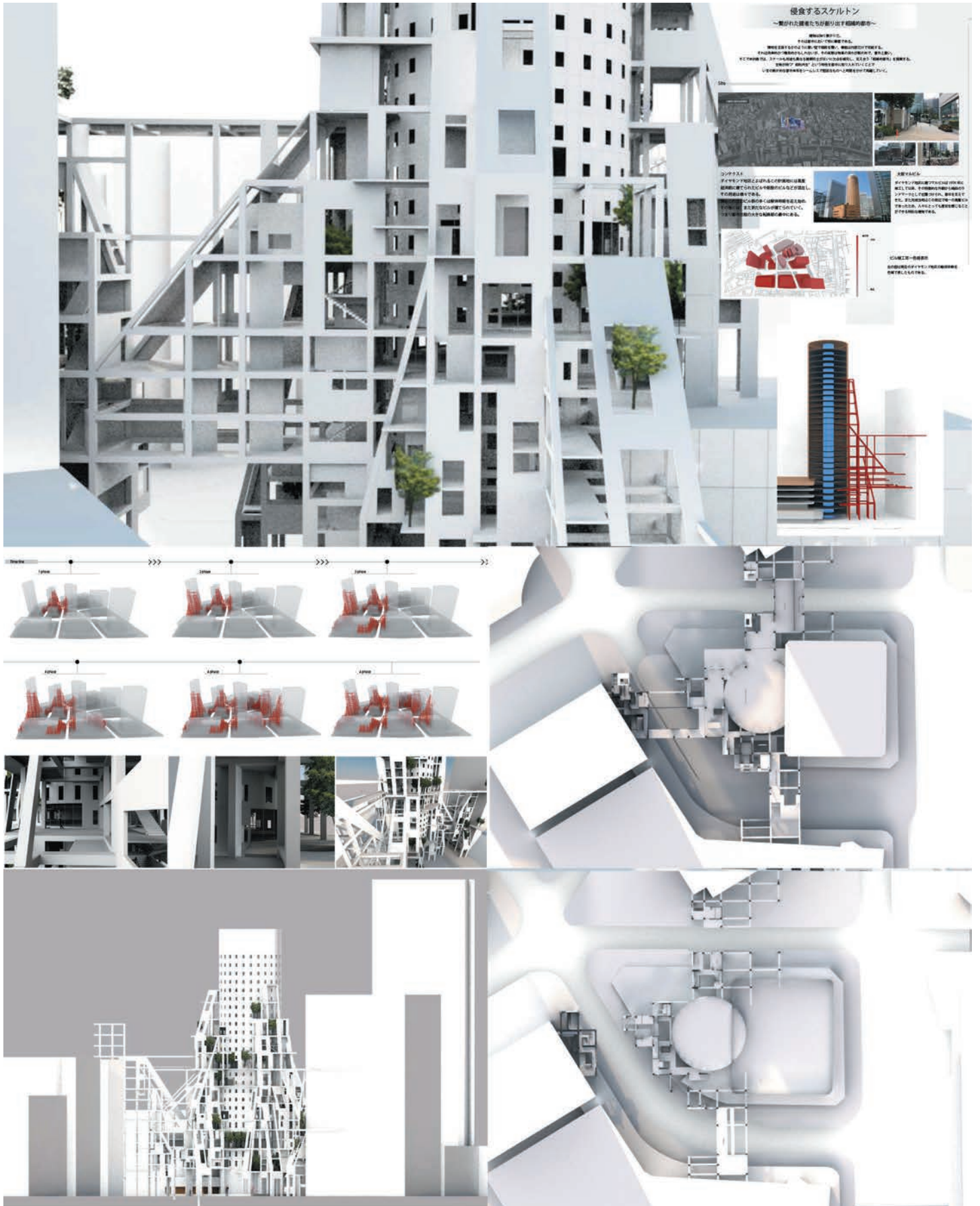


浸蝕するスケルトン

- 繋がれた建物たちが創り出す相補的都市 -

山下 大志
Taishi YAMASHITA
歴史意匠研究室

建物は独り善がりだ。それは都市において特に顕著である。陣地を主張するかのように厚い壁で周囲を覆い、機能は内部だけで完結する。それは効率のかつ簡易的かもしれないが、その実態は物事の流れが断片的で、意外と脆い。そこで本計画では、スケールも用途も異なる建築同士が互いに欠点を補完し、支えあう「相補的都市」を提案する。生物が持つ「相補共生」という特性を都市に取り入れていくことでいまの断片的な都市体系をシームレスで堅固なものへと時間をかけて再編していく。



Graduation Project 卒業制作

01 灯	水口 萌子	—————	26
02 「木組み」を生かした棚	三木 伸也	—————	27
03 RESIN LIGHT	重本 航汰	—————	28
04 kaya room divider	嵯峨山 亮	—————	29
05 茅アート	福重 海	—————	30



RESIN LIGHT

重本 航汰
Kota SHIGEMOTO
建築計画研究室

照明は一度設置すると、電球の交換であったり故障の修理などであったりでしか触る機会がなく、普段の意識の外にあるものだ。使用者の意識的にもっと身近なものにしたいと考え、使用者が照明どうしの組み合わせを変えることで照明に触ることができるという付加価値をつけようと考えた。この照明にはいくつかの三角形の穴があけてある。その三角柱を差し込む。二つも照明の穴を重ねて差し込むと二つの照明を決まった位置で固定できる。こうして照明どうしを組み合わせて配置を入れ替えて利用することで使用者の意識に近い照明になると考えた。



Description of the design

Concept

この照明は「照明の交換が容易、修理も容易」を実現するための照明です。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

System

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

Diagram

あああ

Case studies

- Frank Lloyd Wright Bellini**
- George Nelson Bubble Lamp**
- Paul Henningsen's Pendant**

Study

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

Drawing

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

Purse

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

Design

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

Ideas

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

組み合わせ例

中心のパーツとそれを外側のパーツで囲うというシステムに則ったいくつかのデザイン案を作った。様々なデザインから今回は三つの照明を制作した。

Production Process

この照明は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。照明の交換や修理は、照明の交換や修理が容易に行えるように設計されています。

1. 丸太の切り口を用意する。

2. 下書きの線に沿って切取る。木の色味や研ぎをしておく。

3. 外周を砂で覆ったパーツ同士を板で張り付ける。今回はアルミ板を使用。

4. 外周を無断でできないようにしっかりと囲う。粘土を使用。

5. 白角の穴をあけるため、四角柱を置き、砂の中へレジンを通す。三角柱の中心にレジンが流れ込まないように注意。角を入れるときはこの角を入れておく。着色する場合は着色剤を容器の中で着色料をいれ混ぜておく。LEDを設置しておく。

6. 硬化するまで24時間〜48時間放置する。後で、乾燥などは硬化する前に除去しておく。とばれたりしないか確認が必要。

7. 硬化後の表面の層をテープやバリとりなどで削り上げを落とす。



kaya room divider

嵯峨山 亮
Ryo SAGAYAMA
建築計画研究室

日本は古くから住居に茅葺屋根を取り入れてきた。茅葺屋根とは、茅を材料に用いて、葺く屋根の構造の一つである。茅葺屋根は吸音性、断熱性、保温性、通気性にすぐれている。一方で、耐火性に乏しい。耐久性を高めるために屋根を燻製させないといけない。茅を葺くのに多くの人手と費用がかかるという欠点がある。これらの欠点により、昨今では日本で茅葺屋根を取り入れる住居が減少し、目にするのが珍しくなっている。また、茅葺の伝統技術も伝承されずにいる。このことを踏まえて、私は茅葺の技術を人手やコストが多くなる屋根ではなく、家具に用いて欠点を補い、利点を活かしながらも現代の生活に合い、ニーズに応える家具を製作したい。

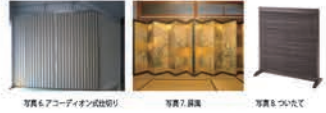


制作概要

日本は古くから住居に茅葺屋根を取り入れてきた。茅葺屋根とは、茅を材料に用いて、葺く屋根の構造の一つである。茅葺屋根は吸音性、断熱性、保温性、通気性にすぐれている。一方で、耐火性に乏しい。耐久性を高めるために屋根を燻製させないといけない。茅を葺くのに多くの人手と費用がかかるという欠点がある。これらの欠点により、昨今では日本で茅葺屋根を取り入れる住居が減少し、目にするのが珍しくなっている。また、茅葺の伝統技術も伝承されずにいる。このことを踏まえて、私は茅葺の技術を人手やコストが多くなる屋根ではなく、家具に用いて欠点を補い、利点を活かしながらも現代の生活に合い、ニーズに応える家具を製作したい。



茅とは
植物の葉と根からなる草類で、イネ、スズガ、ススガなどの草類の中でも、葉が細く、根が深く伸びる性質があり、刈り取った後、乾燥させることで繊維が硬くなり、丈夫になる。この性質を利用して、家具に用いている。



間仕切りとは
部屋の区切りや仕切りなどに用いられる。壁や扉、障子などによって仕切られる。ここでは、茅葺の素材を用いて、部屋の区切りや仕切りなどに用いている。

DATA

用途 店舗・展示場
材料 茅、スズガ、ススガ
寸法 高さ 200cm、幅 100cm、奥行 100cm



制作対象空間
この空間は、展示場や店舗などに用いられる。ここでは、茅葺の素材を用いて、部屋の区切りや仕切りなどに用いている。

制作手順

手順1 原料の選別と乾燥
手順2 乾燥させた原料を束ねる
手順3 束ねた原料を束ねる
手順4 束ねた原料を束ねる
手順5 束ねた原料を束ねる
手順6 束ねた原料を束ねる
手順7 束ねた原料を束ねる
手順8 束ねた原料を束ねる
手順9 束ねた原料を束ねる
手順10 束ねた原料を束ねる
手順11 束ねた原料を束ねる

No.001 製作品 No.001 は茅葺屋根の構造を模倣して、内部に挿入した木を、その間に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.002 製作品 No.002 はスズガをイメージして、その間に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.003 製作品 No.003 はスズガをイメージして、その間に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

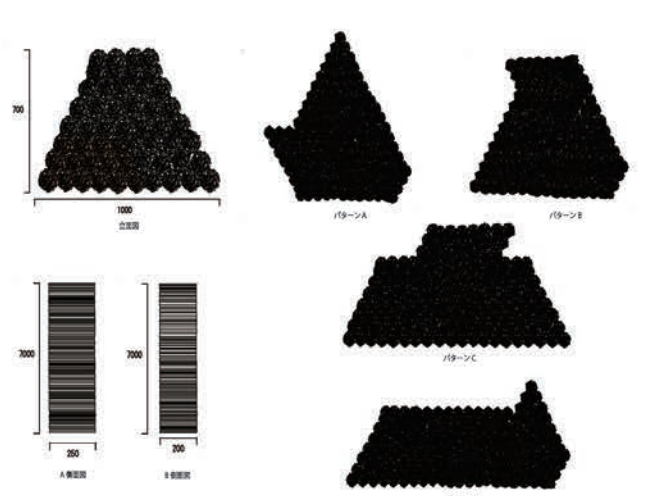
No.004 製作品 No.004 は No.003 の間仕切りの木枠を、その間に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.005 製作品 No.005 は No.004 の茅と木の構造を模倣して、内部に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.006 製作品 No.006 は No.005 の茅と木の構造を模倣して、内部に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.007 製作品 No.007 は No.006 の茅と木の構造を模倣して、内部に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。

No.008 製作品 No.008 は No.007 の茅と木の構造を模倣して、内部に挿入した。足場からは茅が露出している状態を、内部は茅葺屋根の構造をイメージした。間仕切りは木の枠と茅を合わせたことにより、間仕切りが実現した。



Master's Design 修士設計

01 街は我が家 - 未完の家々から成る相互補完の暮らしの提案 -	青木 康大	—————	34
02 変遷する教育施設 - 時間と共に変化していくヒューマンスケールと教育の問題に関する研究 -	笹尾 浩二	—————	36
03 他者と出会う住居 - 公と私の考察による交流を誘発させる中間領域の提案 -	實光 周作	—————	38
04 集合住宅から生まれるまち - 集合住宅を核とした建築と都市の更新手法の提案 -	中村 岳史	—————	40



街は我が家

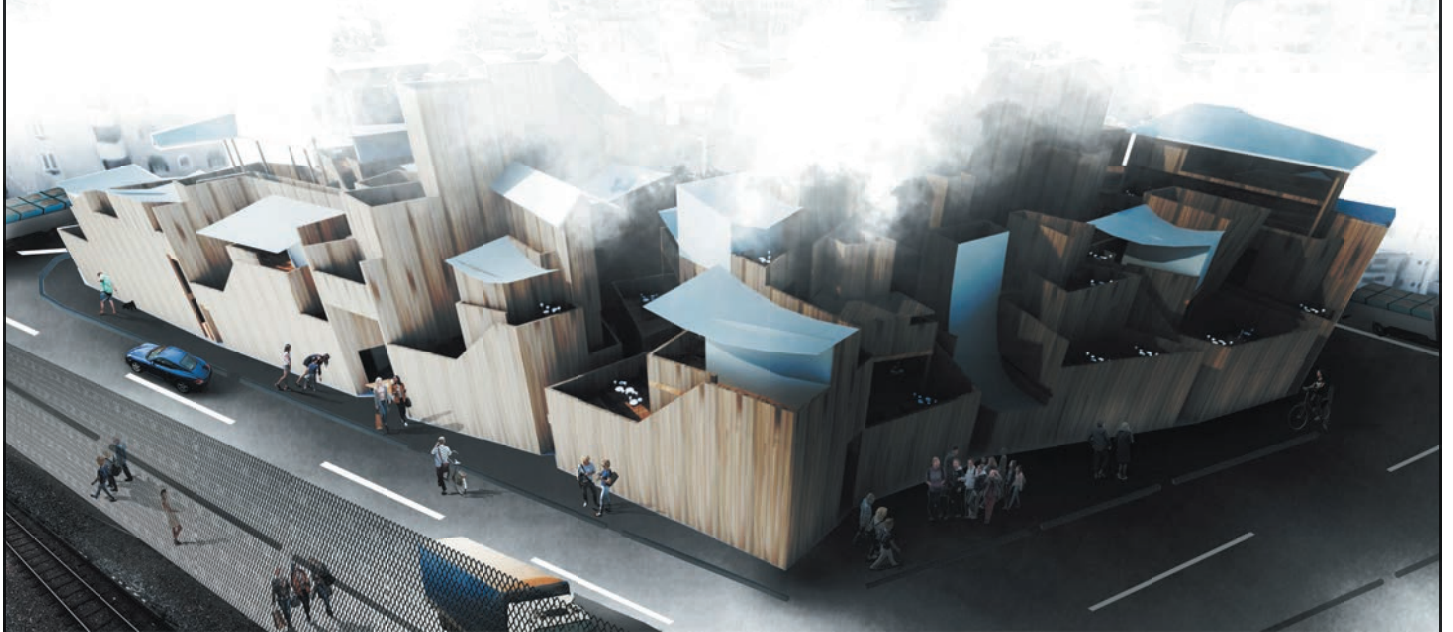
- 未だの家々から成る相互補完の暮らしの提案 -

青木 康大
Yasuhiro AOKI
建築意匠研究室

本計画では、街を構成する大きな要素である「住宅」にメスを与える。住宅のプライバシーな要素を評価するあまり、人の生活が住宅の中で完結できてしまうことが、都市の均質な風景を作り上げる原因ではないかと考えた。そこで、住民と住民が互いの生活を補完し、支え合う街を計画する。住民が自らの家に暮らすのではなく、街という大きな家に暮らすことで、人々の生活が街を循環する豊かな風景が出来ることを目的とする。

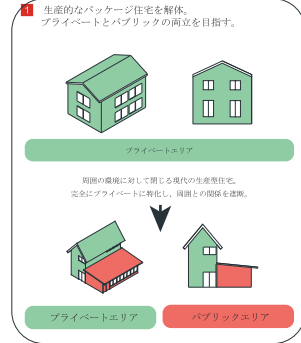
街は我が家

「家にキッチンが無いから、隣の〇〇さんの大きなキッチンで夜ご飯を作ろう」
「家にお風呂が無いから、今日は〇〇さんの温泉に浸かりにいこうか」。
そんな街の緩やかな日々と住民の生活が街を循環するサイクルをデザインする。

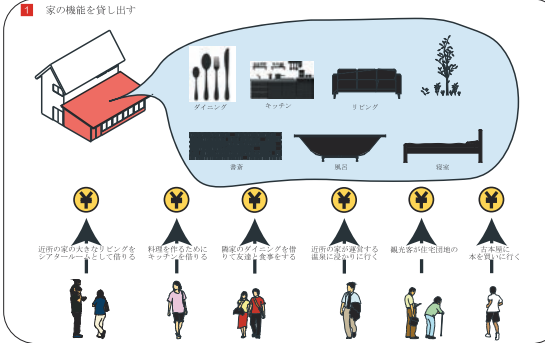


デザインプログラム

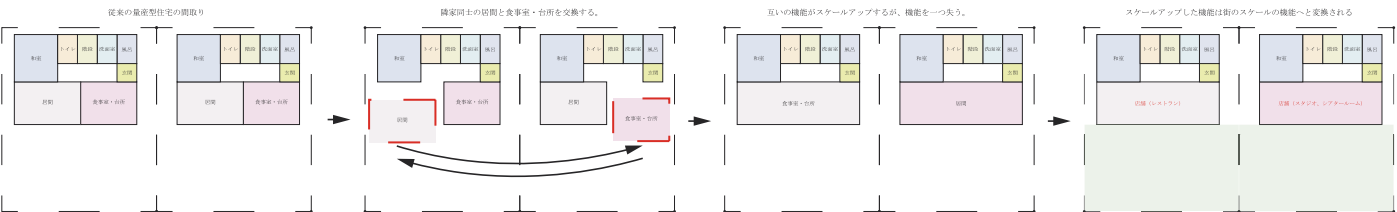
■プライベートとパブリックを両立させるカタチ



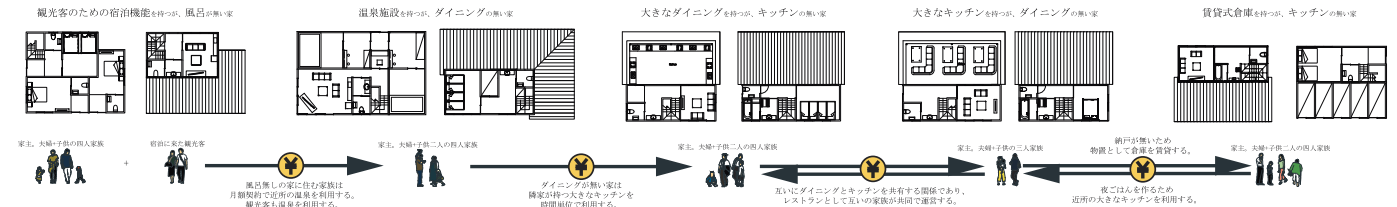
■家に住み、稼ぐカタチ



■互いの生活を補完しながら稼ぐ



■公的空間を抽出したことにより、欠けた生活機能のピースを補完し合う。



温泉の家

空を切り取る温泉

アートの発想から展開されたこの温泉は、天に向けて細小していく空が空や雲の移り変わりを映し、小さくなる間に空の景色が集合していき、大山が雄大なるように外に拡散されていく。



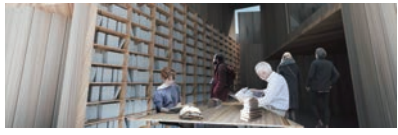
空に広がる温泉

空に対して壁が広がってゆき、空の景色が拡大され、切り抜かれる。山と山に挟まれるようにな露天風呂の空間は、広大な景色と空間を体験することができる。



路地を繋ぐ古木屋

トンネル状の造形が路地と路地を繋ぎ、人の流れを、シームレスにパブリックなお店の空間へと繋げる。古木屋でのアクティビティが二つの路地を複層的に繋げながら、街に抜けを作り、古木屋の空間へと誘う。



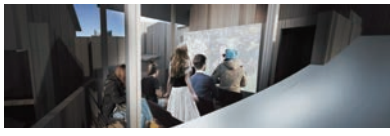
絶景の旅館

積み重ね合う家々のトップにまでびっしり絶景の旅館。軒下の半屋外空間で気持ちの良い風を受けながら、街の風景を見下ろし、ゆっくと時間を感ずる空間。



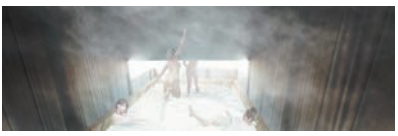
高台のシアタールーム

高台に設計された集合場をシアタールームとして活用。家の壁をスクリーンとして利用し、大層な娯楽空間を創出する。パブリックイベントなどのイベントにも活用することができ、住民の集いの場となる。



大屋根の温泉

屋根下の風呂と屋根に覆われない露天風呂の二つの空間を大屋根で演出している。大屋根で半屋外と屋外を連続的に切り切り、露天風呂の空間と露天風呂からの景色を強く演出する中間領域を作る。



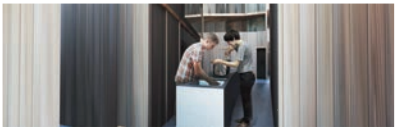
谷の温泉

谷底を流れる川のようになり、温泉が細長く高い壁に挟まれた露天風呂。自然の地形から体感できるような露天風呂。露天風呂として展開することで非日常的な時間を過ごすことが出来る。



路地を繋ぐ調理空間

トンネル状の造形が路地と路地を繋ぎ、人の流れを、シームレスにパブリックなお店の空間へと繋げる。調理の風景や料理教室などの催しの風景が二つの路地を複層的に繋げながら、街に抜けをつくり、キッチン空間へと誘う。



星降る旅館

寝室の空間の天井が星空に向け広がり、自分だけの星空を堪能することができる旅館。視界に映る星空を眺めながら切り抜き、寝室に向けて降り注ぐ。天に対して絶景を手に入れる。



大屋根の舞台場

踊り合う大屋根を駆け回り、ステージ空間と座席空間をそれぞれ演出している。子どもたちの集い場や小規模のコンサート会場として活用される。



空に繋がる温泉

空に対して平行に伸びてゆく露天風呂。建物で敷き詰られたこの街で、お湯に浸かる人たちが空の景色を楽しむことが出来る。この造形を基本形として、様々な露天風呂を展開される。



空を投影する温泉

壁にすがり、お湯に浸かる人間のフォームから違和感なく、空を楽しむことが出来る露天風呂。スクリーンは板材が投影されるように、空の景色が切り抜かれる。



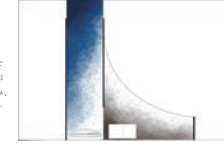
路地を繋ぐダイニング

トンネル状の造形が路地と路地を繋ぎ、人の流れを、シームレスにパブリックなお店の空間へと繋げる。キッチンのお店と連携してレストランを経営するなど、二つの路地を複層的に繋げながら、人々の活動がお店から路地に溢れてゆく。



布の旅館

寝室に向けて高さが生まれていき、夜を投影する。屋根は布の素材で構成されており、昼間は柔らかく、光を室内に落とし込み、夜は屋根に留まる雲や星が影となり、インテリアとして室内を演出する。



絶景レストラン

街を一瞥することができる高台に設計されたレストラン。家にダイニングやキッチンが近い家の住民や、この街以外の人々が、食を共にする。



古木屋の家

旅館の家

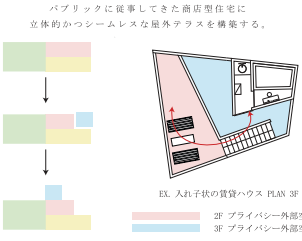
集会所の家

キッチンの家

ダイニングの家

レストランの家

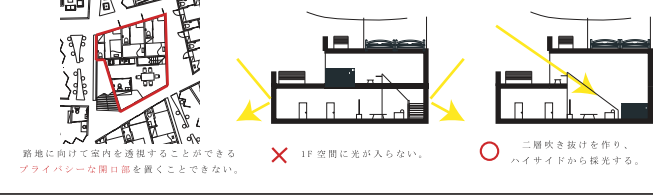
商店型住居がプライバシーな外部を持つ。



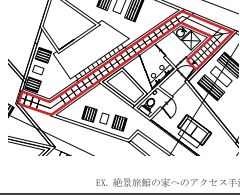
開放型店舗住居(キッチンの家、ダイニングの家、古木屋の家)の1F空間への採光の手法



閉鎖型店舗住居(旅館の家、賃貸倉庫の家、賃貸ハウスの家)の1F空間への採光の手法



屋外階段の挿入



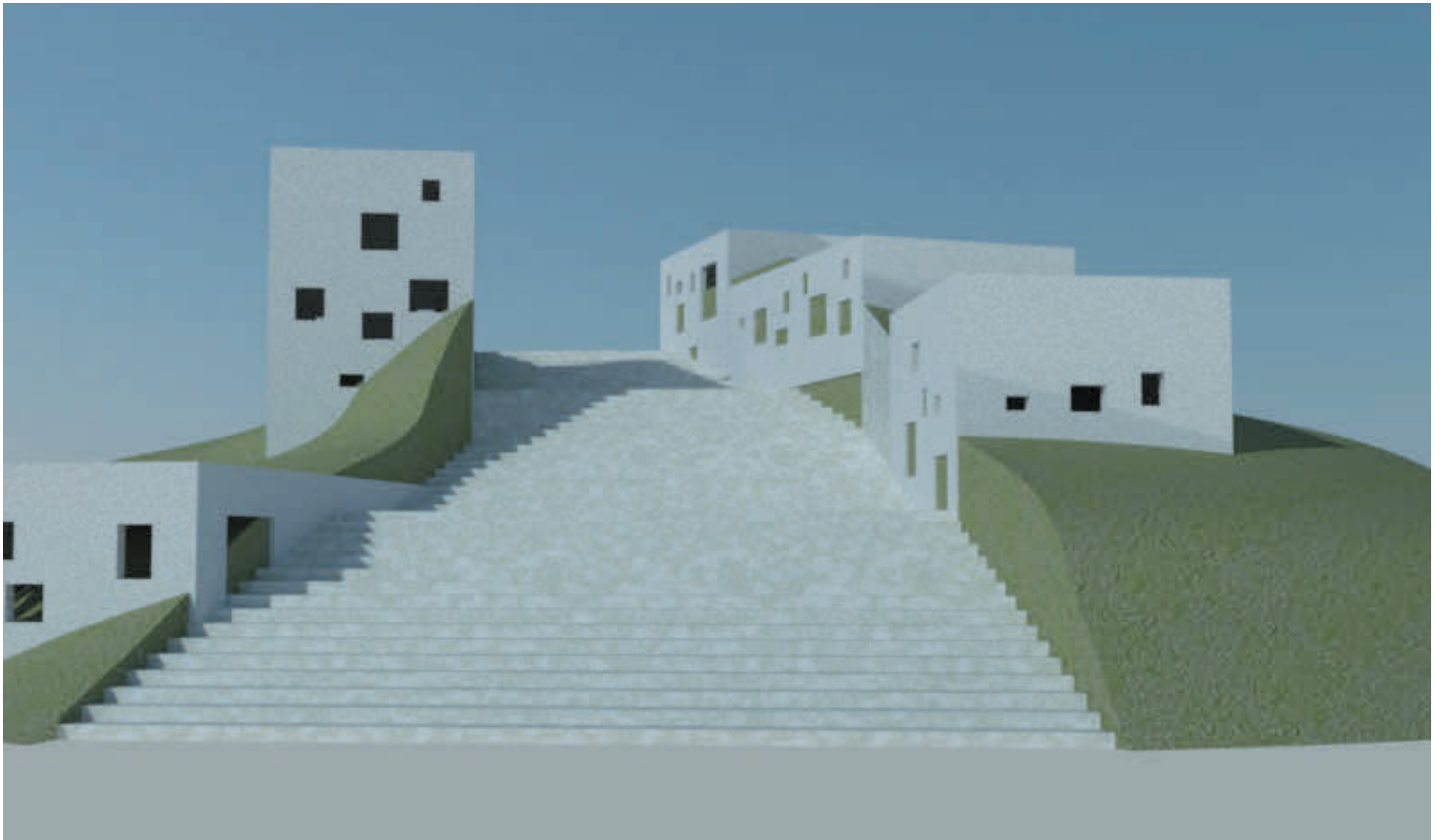


変遷する教育施設

- 時間と共に変化していくヒューマンスケールと教育の問題に関する研究 -

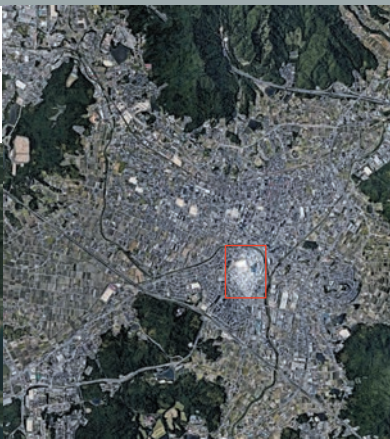
笹尾 浩二
Kouji SASAO
建築意匠研究室

教育は人間に対して基礎的な知識や技術を養うだけでなく、人間性や社会性の形成を目的としている。教育の歴史は、民間から行政への転換や、戦時中の「戦時教育令」など現代の教育に大きく影響を与えている。この影響は現代の教育環境に対して善し悪しがあり、日本の教育現場は変遷している。現代の教育方針は人間性豊かな児童・生徒を育成する事であり、豊かな人間性・個性を伸ばしていく為の教育が重要視されている。本計画では、施設の境界を曖昧にし、地域住民の生活動線を敷地内に挿入することで、児童・生徒の関係性が生まれてくる。スケールの違いを利用して人の動線を操作し、物理的ではなく感覚的に区別する。これによって教育の中に地域住民が自然に入り込み、地域と連携した教育が可能になることを願う。



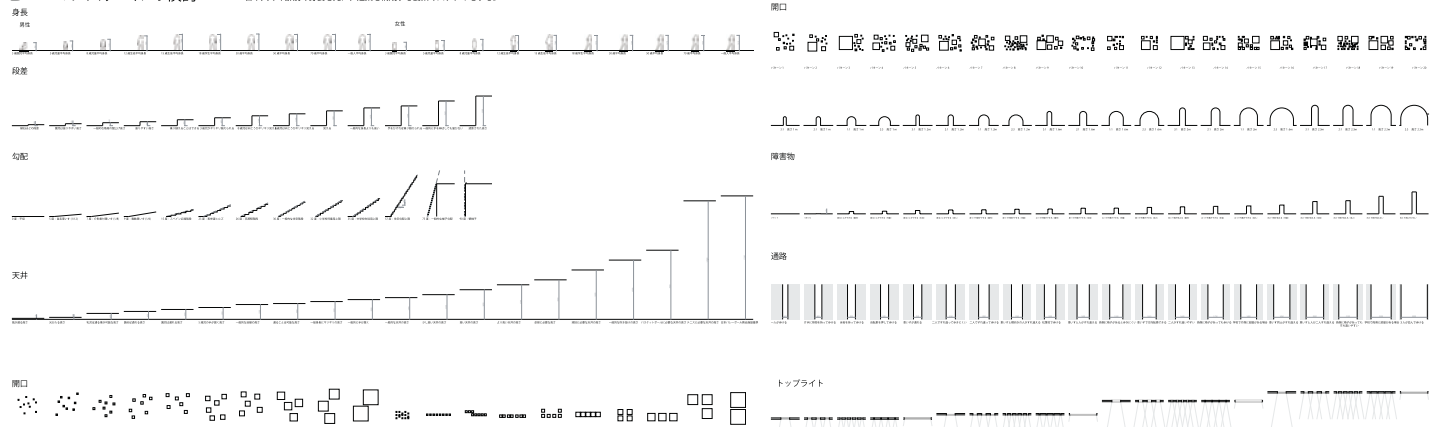
計画地

本計画地は広島県東広島市西条町中央にある小高い丘を敷地とした。東広島市は広島県の中央部に位置する市であり、総人口は約20万人である。その中でも西条町は日本有数の日本酒の産地でもあり、酒蔵通りなどの街並みも残っている。加賀学園都市や広島市のベッドタウンとして人口増加率が高く、大学関係などにより外国人の割合は全体の約2.6%(4695人)である。地理的には瀬戸内海沿岸から中山間部まであり、標高差が大きい。西条盆地を中心に周辺に点在する小盆地から構成されているため、夜と昼、冬と夏で寒暖差が大きい。



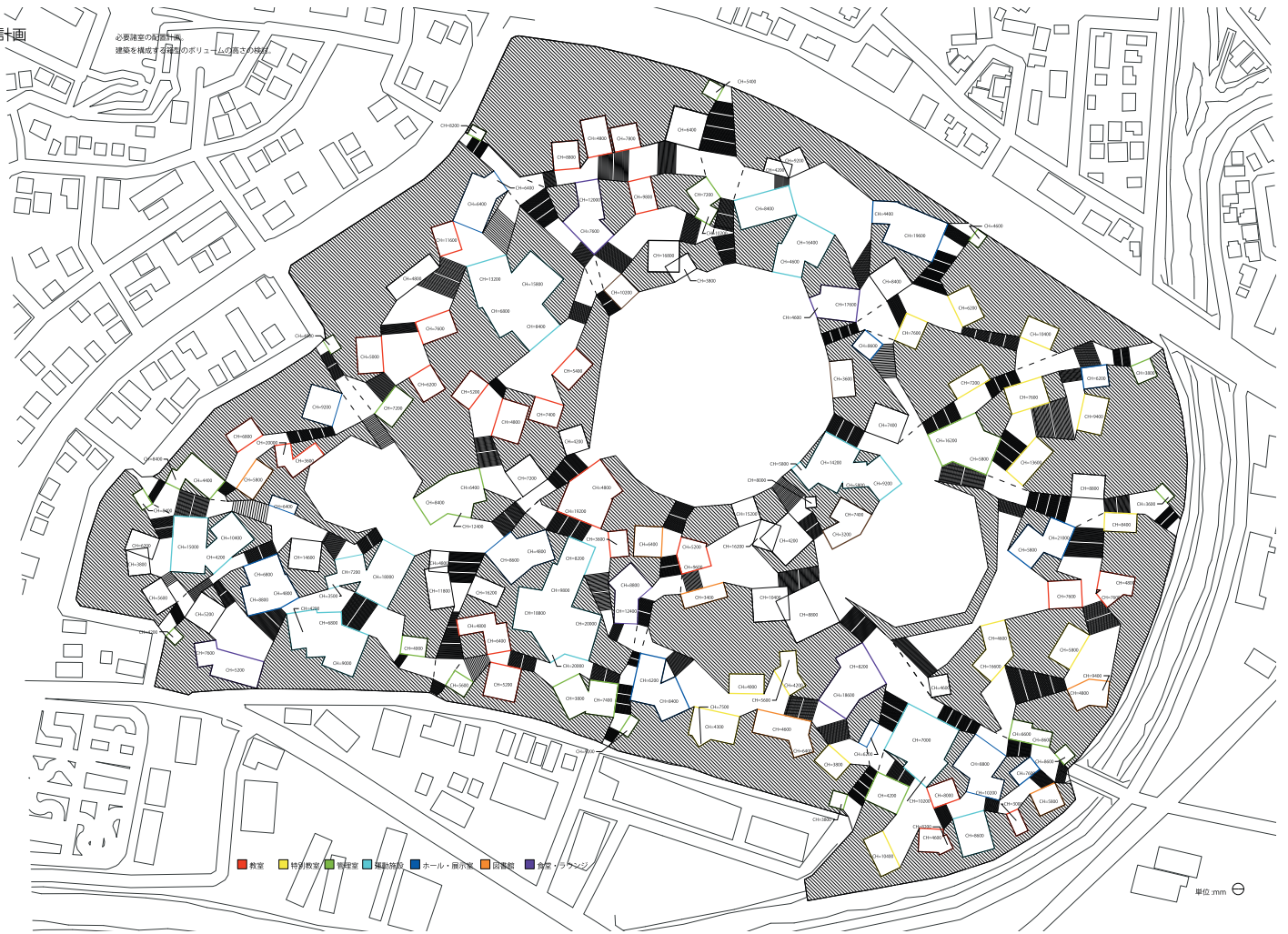
ヒューマンスケールの検討

日本人の年齢別の身長を元に、建築を構成する要素のスタディをする。

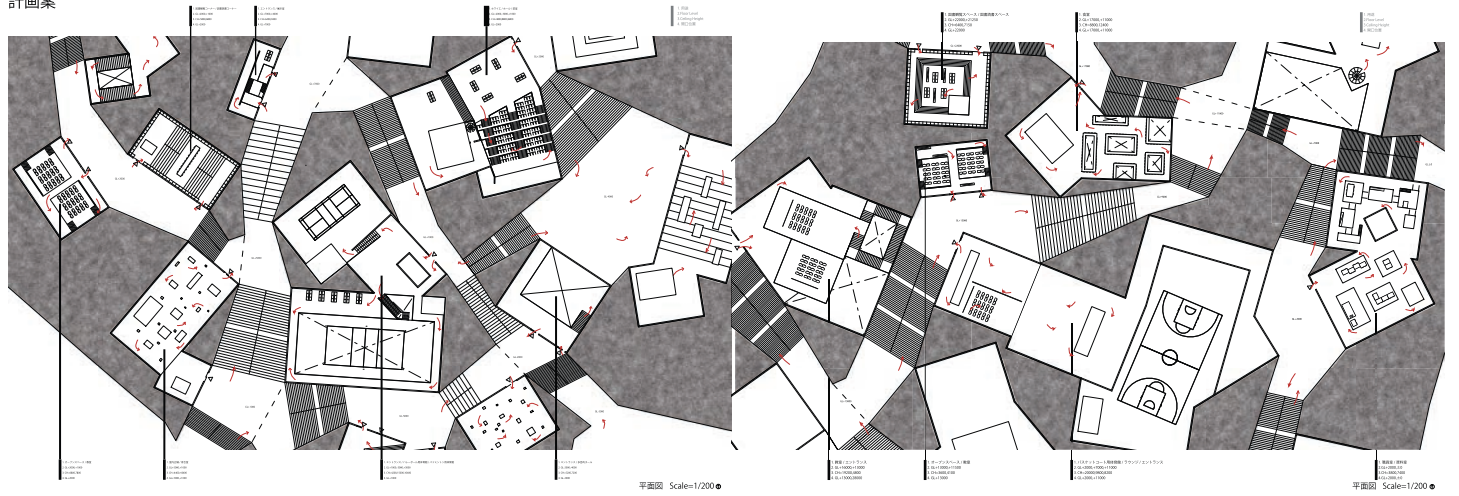


提案計画

必要建築の高層計画
建築を構成する複数のボリュームの配置



計画案



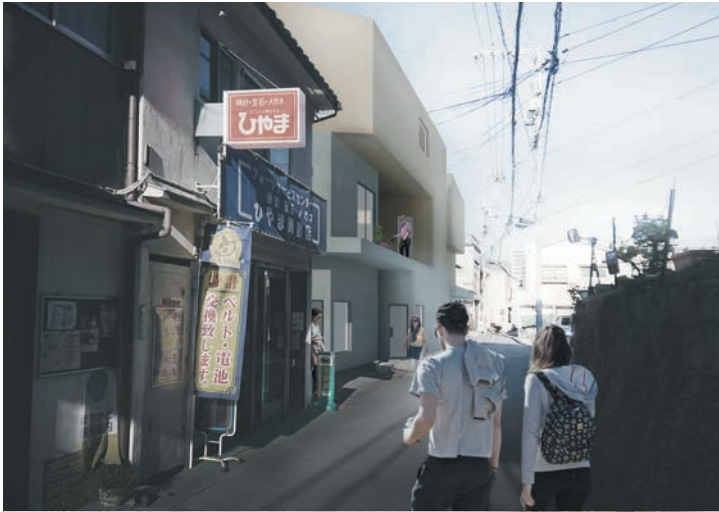


他者と出会う住居

- 公と私の考察による交流を誘発させる中間領域の提案 -

實光 周作
Shusaku SANEMITSU
建築意匠研究室

公の性質を持つ私的空間を職住一体となっている住居や家開きを積極的にやっている住居など事例を対象に研究、考察することでいくつかの要素を抽出する。また、私の性質を持つ公的空間では、道路や道などが住居に対する一番近い公共空間と考えた。その中でも路地といった道幅の狭い道が私の性質を持つ公的空間なのではないかと考え、路地の幅や構成などから研究し、要素を抽出した。これらの要素を元に手法を確立し設計、計画を行う。



01. 路地設計にあたって

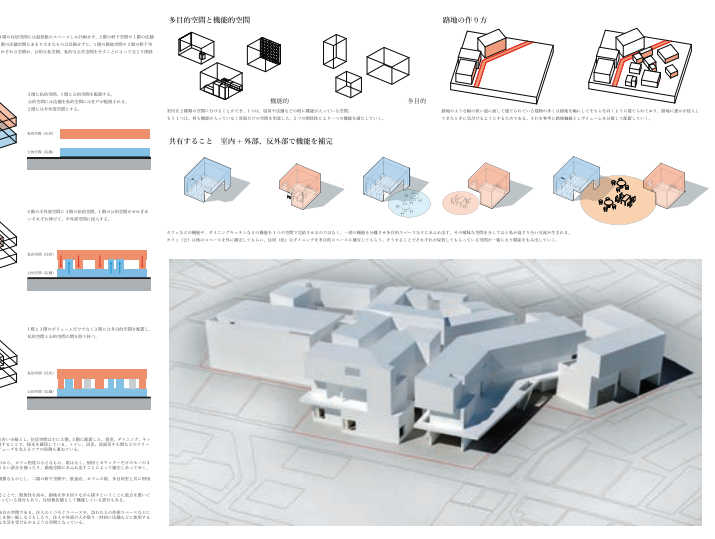
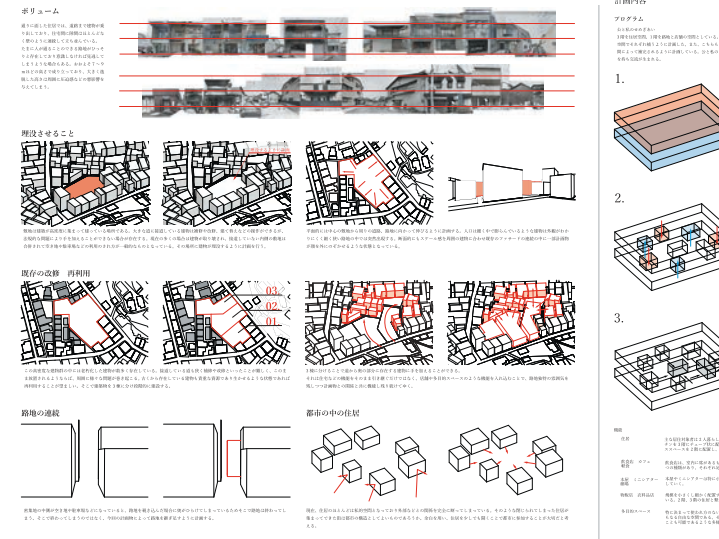
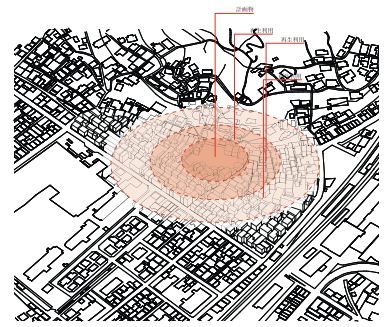
02. テーマについて

03. 背景



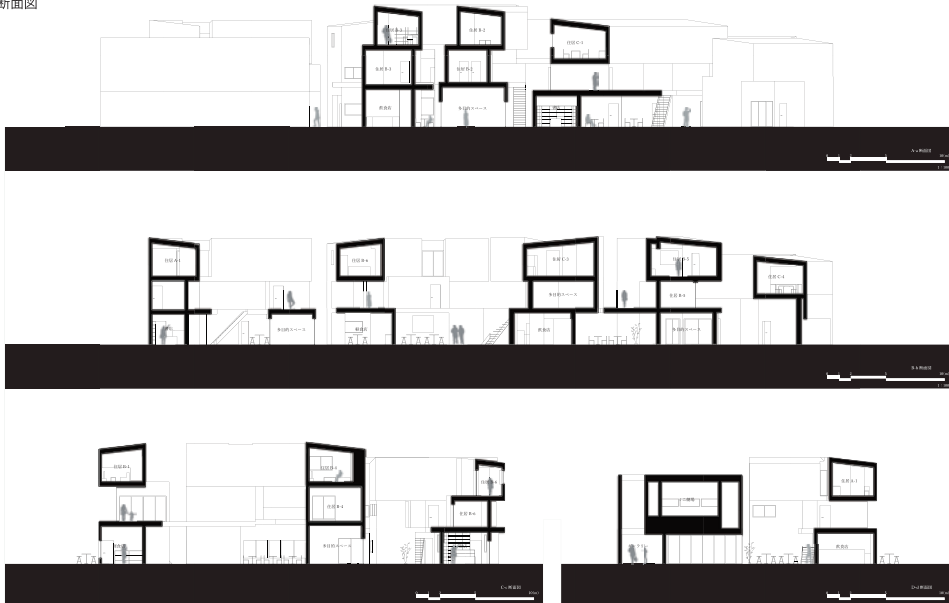
発信地点

今回の計画により発信性、交流を促すことで周辺に波及を生み出す。また多岐の用途を併用することで、周辺から取り残されたり、閉鎖的な環境に陥りやすくなるリスクを減らす。閉鎖的な環境に陥りやすくなるリスクを減らすことで、周辺から取り残されたり、閉鎖的な環境に陥りやすくなるリスクを減らす。

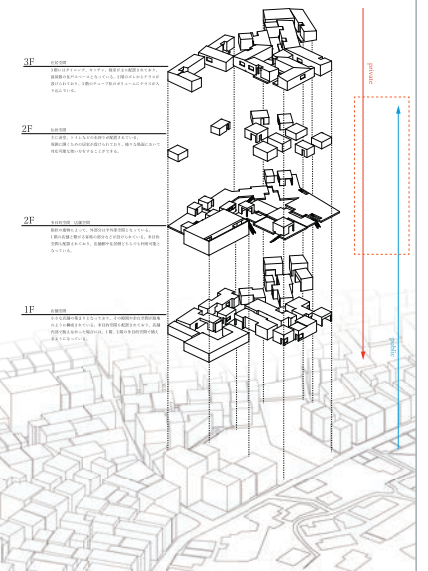




断面図



構成ダイアグラム
図 2. 図 1 敷地のグランドプランを基に、既存の建物の位置関係から、
「既存の建物の位置関係」を基に、既存の建物の位置関係から、
「既存の建物の位置関係」を基に、既存の建物の位置関係から、





集合住宅から生まれるまち

- 集合住宅を核とした建築と都市の更生手法の提案 -

中村 岳史
Takashi NAKAMURA
建築意匠研究室

都市には、昔からの町なみや営為が今も残っているまちがある。しかし、日本の経済発展から著しく都市化が進んだことで風景は均質化し、混沌としている。また、老朽化により取り残しを余儀なくされ、昔ながらの町なみは徐々に消えつつある。現在、供給されている住宅も均一なものばかりで、それが積み上げられてきた集合住宅はまちの至る所に点在し、魅力あるまちを壊している。しかし、都市が均質化に向かう今の時代だからこそ、集合住宅はまちと共存していく上で再興する必要があるのではないか。そこで、昔からある町なみが残る地域において、老朽化した既存の集合住宅を建て替えと、それを核とし、住環境を改善してゆくまちの段階的更新手法を提案する。



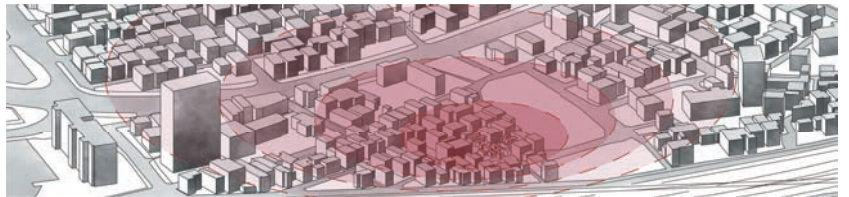
06. Proposal-1 / 計画内容

01. 身近な社会問題と向き合う建築



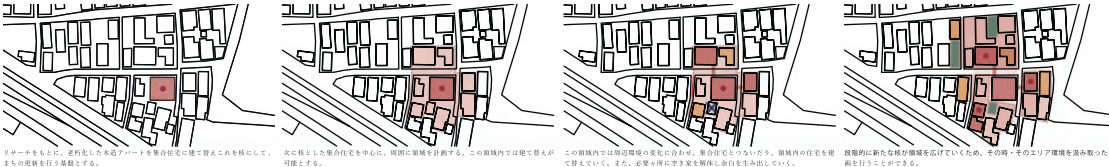
団塊世代の老朽化が進む中、その跡地から新興が入る。住宅の改善が進む一方で、老朽化が加速している。また、木造軸組である既存の団塊世代の住宅は、地震による被害が懸念される。そこで、老朽化した住宅を建て替えると共に機能を新たに計画することで、次の世代に引き継ぐことができる。居住の機能のたまたまを受け継ぎながら住環境を向上させるようなまちにする。そして、まちの人に愛されつつある建築を目指す。

02. 段階的更新



本計画は段階的かつ、段階的に進めていく。まずは老朽化したアパートを建て替えて設計を行う。次の段階に際し、戦後のリサーチをもとにして、空き家となっている住宅を建て替えていく。10年、20年と短い時間をかけて段階していくことで、新たな都市の発展を形成していく。

03. 計画の手順



リサーチをもとに、老朽化した木造アパートを築設地に建て替えてこれを核として、次に核とした集合住宅を中心に、周囲に開発を計画する。この開発内では建て替えるまちの更新を行う基礎となる。

次に核とした集合住宅を中心に、周囲に開発を計画する。この開発内では建て替えるまちの更新を行う基礎となる。

この開発内では周辺環境の変化に合わせて、集合住宅をつらなごり、開発内の住宅を建て替えていく。また、必要に応じて空き家を解体し余地を生み出していく。

段階的に新たな名称が環境を広げていくため、その間々のリア環境を築き上げた計画を行うことができる。

04. まちの展開イメージ



スリムな大衆の「タカネン」を核として、タカネンに広がるまちを計画していくことで、その間、その時に必要な更新を行うことができる。

05. 建築の計画概念



アパート・マンションとは異なり完成した状態を想定して作る建築計画である。この建築計画はまちを設計し、その間、何かが一つ成長を進めるやり方である。

オープン・プランニングとは段階的に完成可能なことを目指して設計される計画である。できるだけ少ない段階で大きな空間を作ることで、開発の用途の変更がしやすい。

ボックス・プランニングとは「時間的な階層の有無が、常にその次の段階に移行するボックスである」と考え、つまり「成長する階層」である。ここで設計して「タカネン」にだけではなく、まちの環境での計画の概念が生まれる。そして、本計画では、アパート・マンションに計画を適用していく。

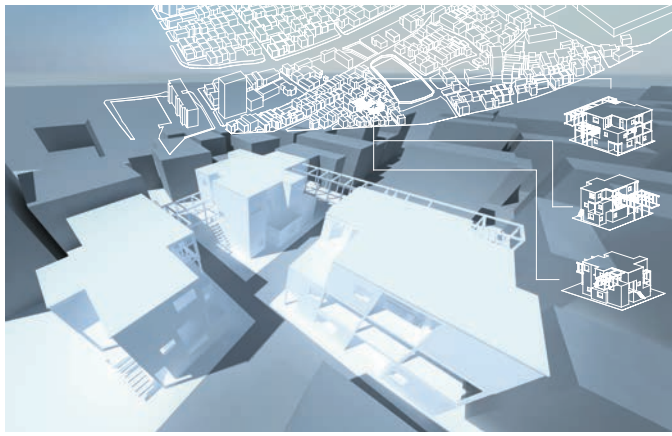
階層ごとに異なる用途を計画していく。

階層の異なるプランニングのようなものを計画する。互いにオープン・プランニング、ボックス・プランニングを組み合わせる。そうすることで、プロトタイプを一貫しやすくなる。また、まちの人とボックスを共有できる。

06. 施工性の違いによる住民参加型の住宅



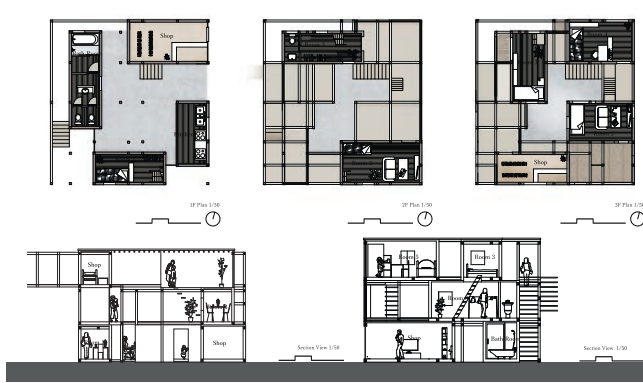
このまちに受け入れられるような計画を、住民参加型のプログラムを掲げる。



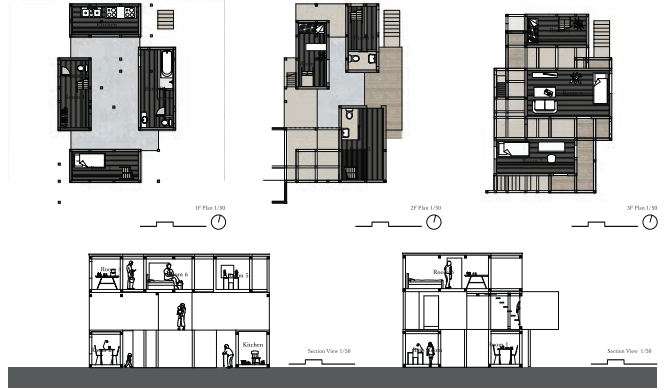
最終計画の3Dイメージ / Final Planning



最終計画の3Dイメージ / Final Planning / Plan 1



最終計画の3Dイメージ / Final Planning / Plan 2



最終計画の3Dイメージ / Final Planning / Plan 3

19. Plan 4 / 長辺立面図・まちの風景



SCENE 1



SCENE 2



SCENE 3



SCENE 4



Elevation view of the city Plan 1/50



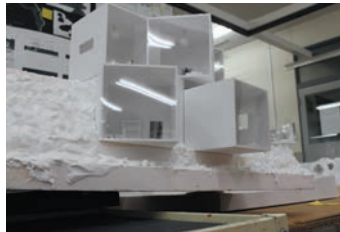
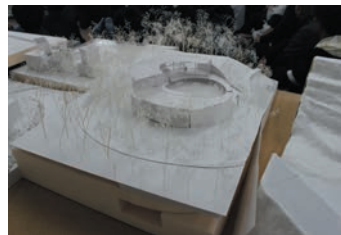
Architectural Design Practice 設計演習 I, II, III

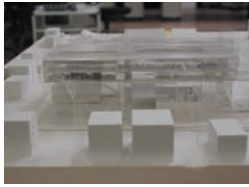
2nd Design	2年	後期建築設計演習 I	01 将来の自邸	—————	44
			02 コミュニティセンター	—————	45
3rd Design	3年	前期建築設計演習 II	01 現代美術のための美術館	—————	46
			02 集合住宅	—————	47
3rd Design	3年	後期建築設計演習 III	01 小学校	—————	48
			02 メディアセンター	—————	49
集中演習		エジンバラ大学		—————	50



将来の自邸

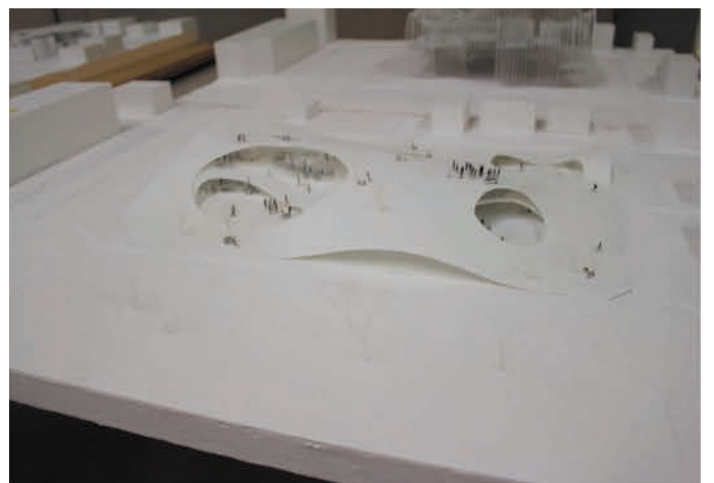
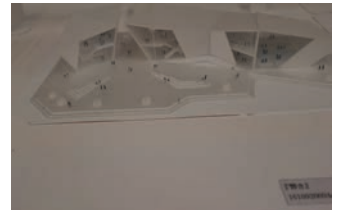
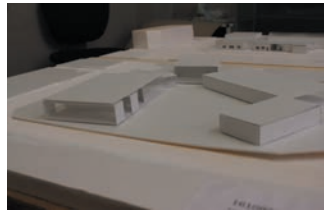
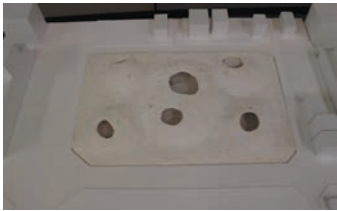
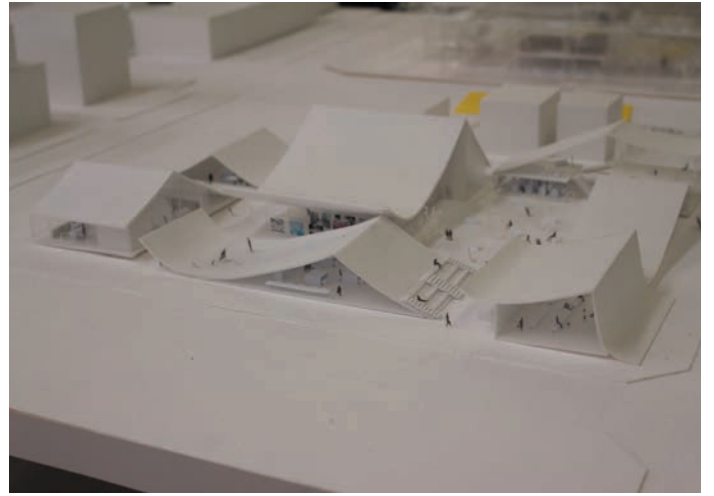
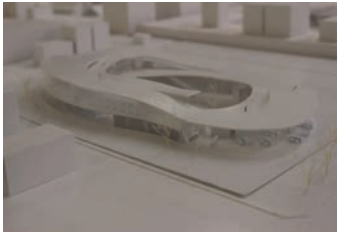
2年後期第1課題





コミュニティセンター

2年後期第2課題



現代美術のための美術館

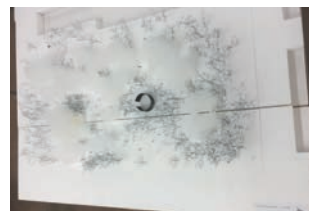
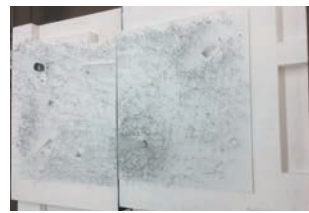
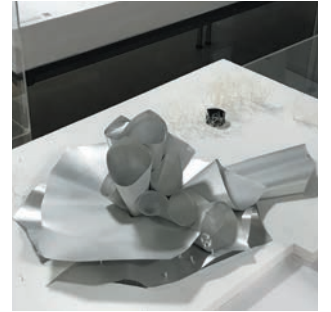
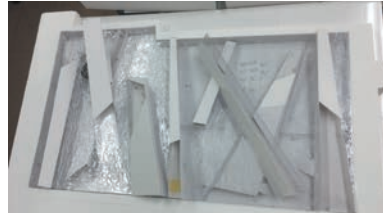
3年前期第1課題

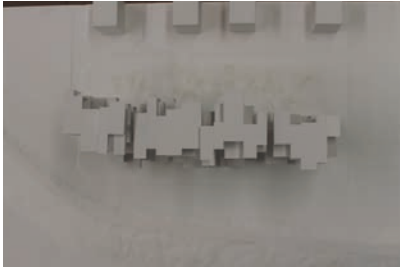


野村 陸 / Riku NOMURA



特別講師 建築家 西田 司先生





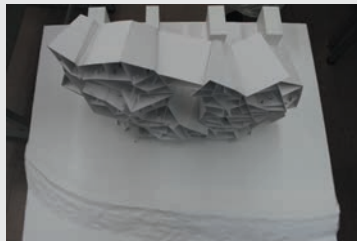
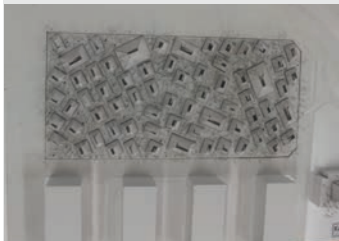
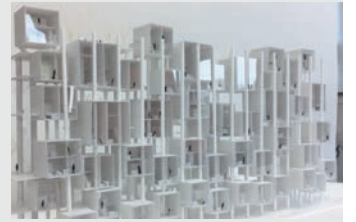
集合住宅

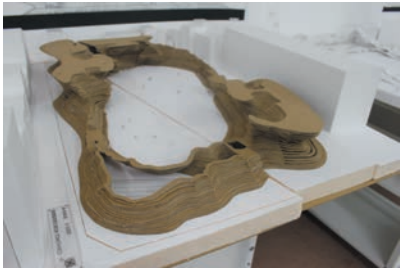
3年前期第2課題

栗林 太地 / Taichi KURIBAYASHI



特別講師 建築家 若松 均先生



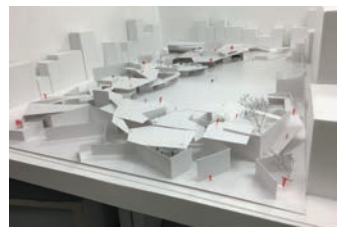
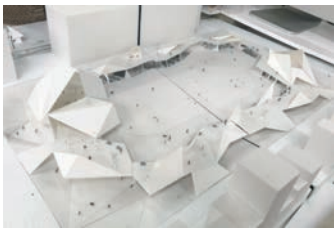
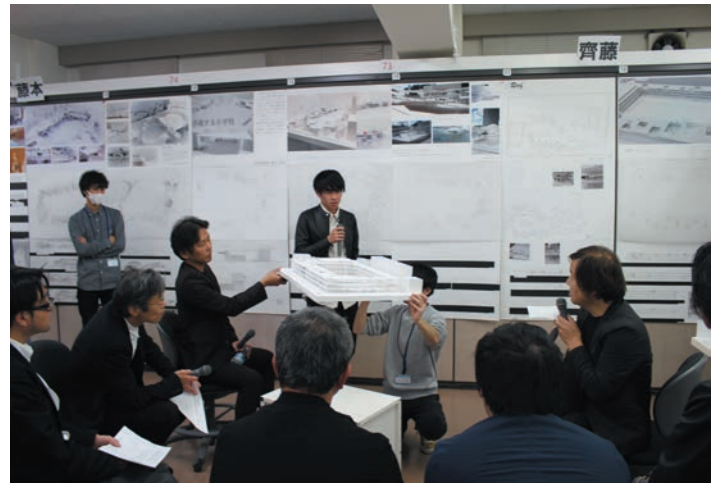
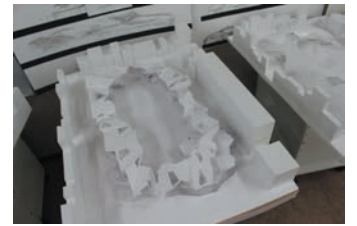
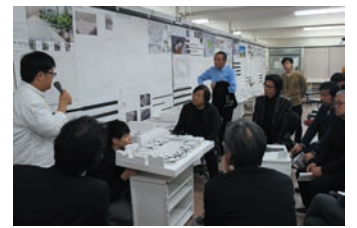
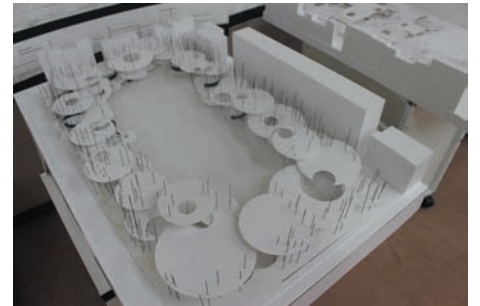
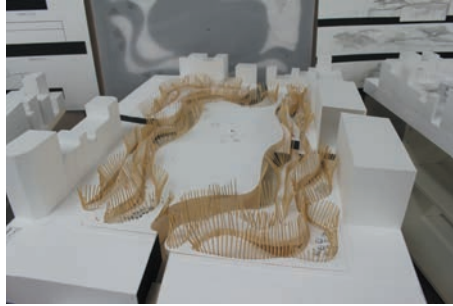


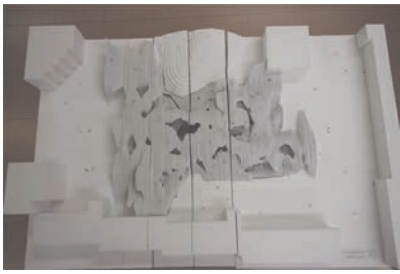
小学校
3年後期第3課題

池田 友彦 / Tomohiko IKEDA



特別講師 近畿大学教授(本部) 松本 明 先生





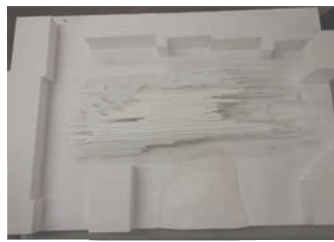
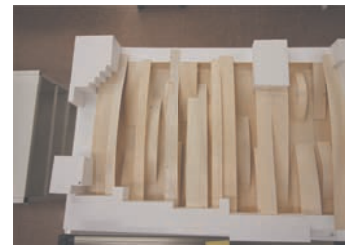
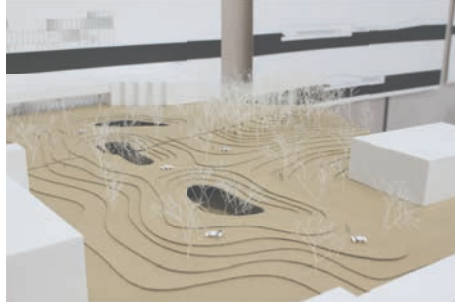
メディアセンター

3年後期第4課題

西川 優 / Yu NISHIKAWA



特別講師 建築家 後藤 武 先生





集中演習 共同：エジンバラ大学



Design Competition 設計コンペ

01 2018年度支部共通事業 日本建築学会設計競技	54
02 建築新人戦 2018	60
03 ひろしま建築学生チャレンジコンペ2018	64
04 仮囲いコンペ	66



「住宅に住む、そしてそこで稼ぐ」

家を解けば、町を結ぶ。

笹尾浩二 / Koji SASAO 實光周作 / Shusaku SANEMITSU 今江周作 / Shusaku IMAE



敷地・尾道

尾道市街地の地形を踏襲して、交通を確保して敷地の活用を促す。新たな生活スタイルを促すための環境を整える。既存の建物を活用し、新たな生活スタイルを促す。既存の建物を活用し、新たな生活スタイルを促す。

尾道が抱える問題

尾道市の人口は、高齢化が進んで、高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。

提案

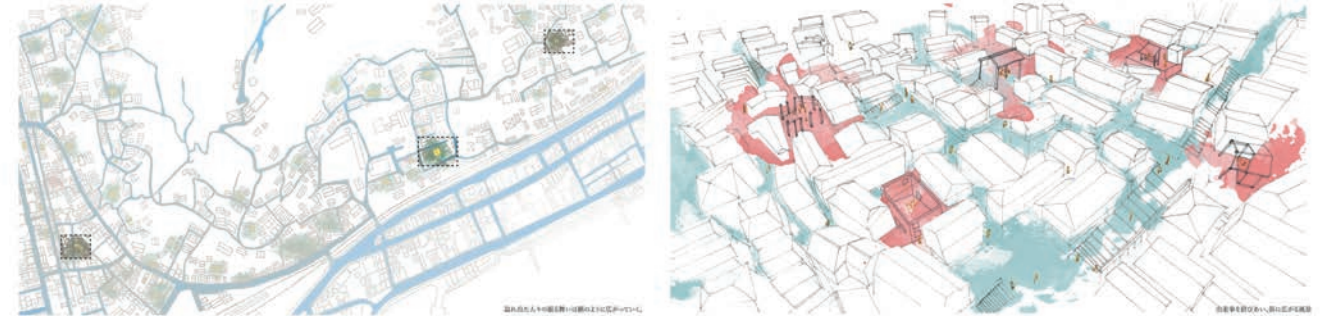
尾道市は、高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。高齢者の割合が増えている。

種別

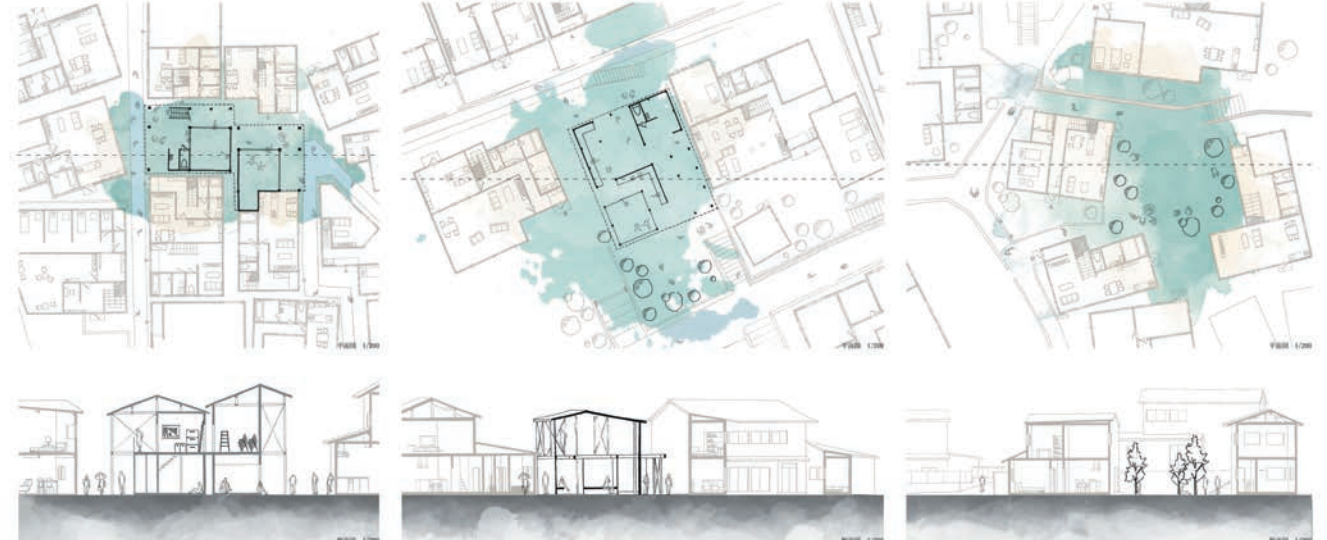
種別を明確にし、用途を明確にする。種別を明確にし、用途を明確にする。種別を明確にし、用途を明確にする。

解く(関引)

問題を解決するための具体的な提案。問題を解決するための具体的な提案。問題を解決するための具体的な提案。



図面1 計画1 計画2 計画3





空き家を耕す

白石 雄也 / Yuya SHIRAIISHI 工藤 崇史 / Takafumi KUDO

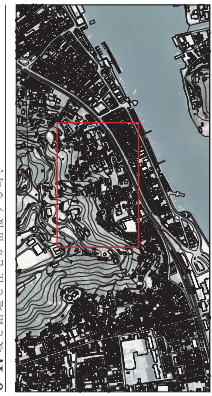
空き家を耕す

— スローライフから始まる小さな経済圏 —



日本人は古来より、大地と共に暮らしを楽しんできました。土地を育て、それを生業とし、集落という小さな共同体の中で、お互いに助け合いながら生活をしてきました。ここ尾道は、多種多様な農業が営まれ、また斜面地に多くの住宅が密接していることから、農業という生業が人々の距離を近づける可能性をもっている。農業を中心としたスローライフという地域消費の礎のサイクルを構築することにより、小さな稼ぎと小さなコミュニティから始まる「小さな経済圏」が生まれる。

01. LOCATION



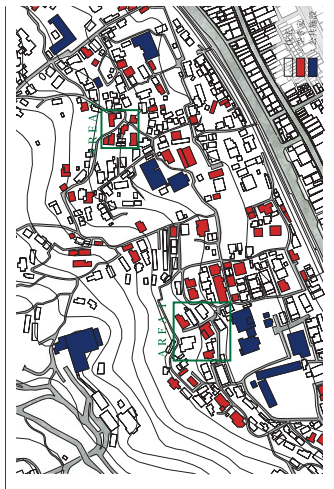
瀬戸内海の島や山々に囲まれた町、広島県尾道市。急な坂と細い路地から構成される斜面地の美しい町並みは、多くの観光客を呼び込み、また、数々の映画作品の舞台ともなってきた。尾道市独自の町並みや建物は、そこで培われてきた、暮らしの歴史や文化でもある。空気が澄み渡る町並みの風景は、高層化や過密化、中心市街地の賑わいなど都市部から遠く離れたエリアでは、地と建物のまわりの風景をつくりだしてきた建物の300軒以上が空き家となり、廃墟化と解体の危機に直面している。

02. RESEARCH



また、跡地と住宅がまぎれ合う斜面地には、尾道特有の農作物を育てるための不整形な小さな田圃が、住宅に隣接するよう存在している。地味な田圃は、農業という身近な地味な地味コミュニティを持つべき田圃が顕著な住宅で完結してしまっているのが現状である。

03. PROPOSAL



空き家という負の遺産をどう活用するかを、利用する農業を中心としたスローライフという地域消費の小さな経済圏のサイクルにより、尾道の斜面住宅地から始まる小さな経済圏を構築する。



路を彩る小さなまち - 日常に現れる屋台装置 -

畠田 直路 / Naomichi NATSUMEDA 寺下 麻里奈 / Marina TERASHITA 松下七海 / Nanami MATSUSHITA

concept

回遊型で街に出現し、消える屋台。
屋台は、あるときは住宅の一部であり、またあるときは住宅から切り離され通り出す。住人は屋台を共有して暮らし、屋台を街の人におすそ分け、同時に暮らす。街に住む人々は、屋台があるのを知りながら暮らしている。屋台が通ると、あちこちの人々で賑わう。人々の生活の場とは切り離されてきた「屋台」が、街に新たなスタート機能を生み出す多様なあるモビリティ・ユニットとして機能する。
屋台を動かしてよって稼ぐという行為は、平穏な日常のなかにも新たなライフスタイルをつくることとなり、また他の住民の新たなライフスタイルをつくる可能性を生み出していくのではないだろうか。

back ground

現代社会において、住宅は単なる「穴」を充てている。人は生活のために仕事や学校に向かい、帰って来た後、どんな生活の「穴のサイズ」の中で、コミュニティは屋台内や職能だけで完結し、同じ町中で住む近隣住民との関係は薄まる一方である。

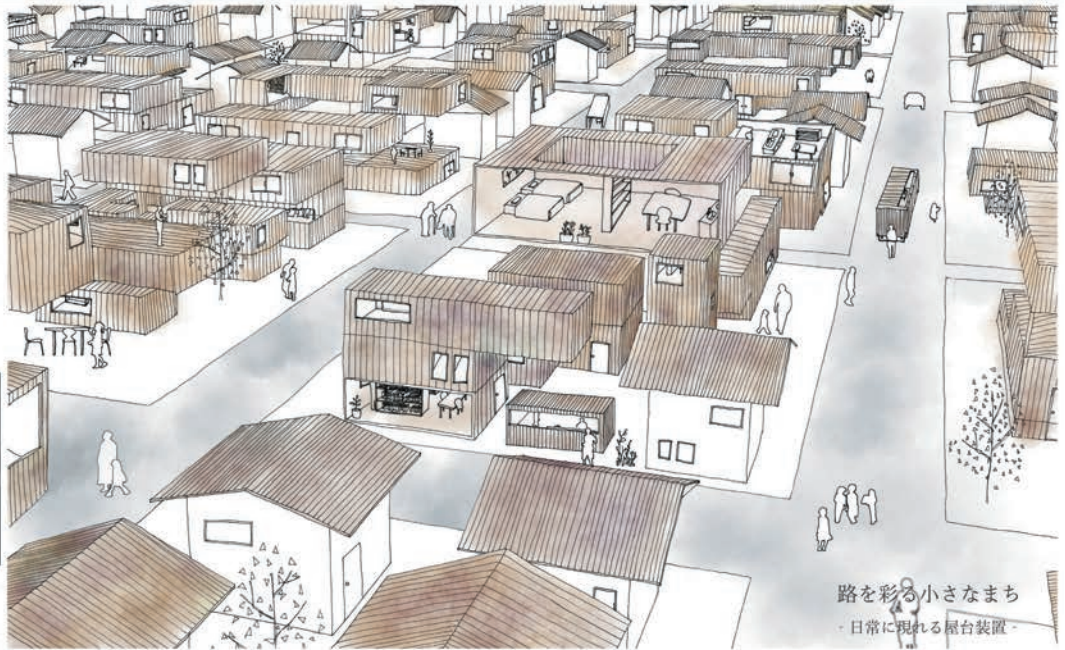
site



この街は広島県広島市東区にある。広島市の中心部から約10分、広島駅が近い。この街は、広島市の中心部から約10分、広島駅が近い。この街は、広島市の中心部から約10分、広島駅が近い。

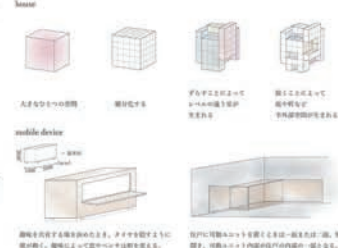
program

移動可能な店舗である「屋台」を住宅に組み込み、屋台が街に移動されているときは住人たちのシェア空間となり、住宅から切り離されたモビリティ・ユニットとして街に移動する。そのユニットは、職能別に仕切られ、街の賑わいを共有する場として、可動時に街の賑わいを共有する。また、屋台の移動に伴って街の賑わいを共有することも可能である。

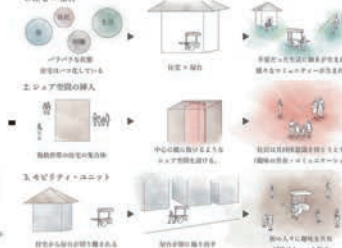


路を彩る小さなまち - 日常に現れる屋台装置 -

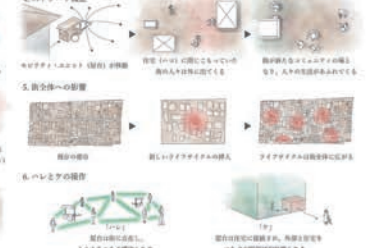
form diagram



concept diagram



4. ストリート機能



exp.1 library



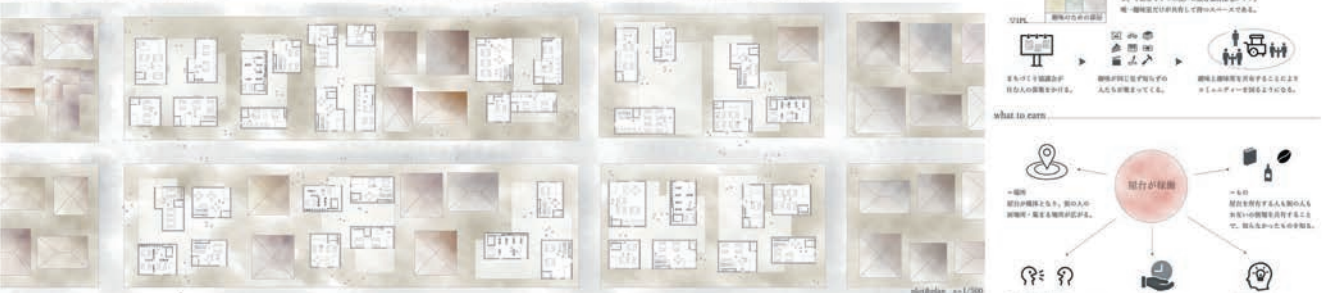
exp.2 reading



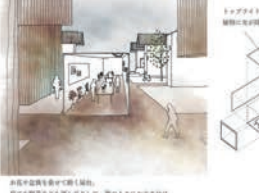
exp.3 collect



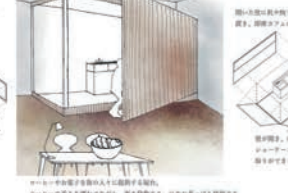
unit plan



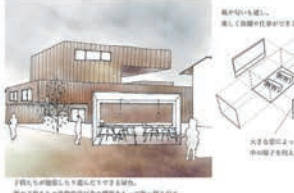
exp.4 parking



exp.5 cafe

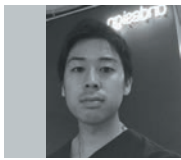


exp.6 breakage



plot plan





Light of River

仲西 優一郎 / Yuichiro NAKANISHI



Light of River

Cover

Site

Background

Interposition Path

まるで彫られたかのような美観の中へ入り込んだ人は、驚かされる美術作品を鑑賞する上での美観の面白さを感じる。連続して空間が作り出され、訪れる人々による自由な行動と空間の連続性を感じることが出来る。美術展覧会がもたらぬ自由な行動と空間の連続性を感じることが出来る。美術展覧会がもたらぬ自由な行動と空間の連続性を感じることが出来る。



広島県広島市中区鞆町
広島市の中心に位置している。お天守閣は広島城跡であり、その周辺には小宮公園や広島城跡公園などがある。付近には広島県立美術館や広島県立歴史博物館などがあり、人気が高い場所である。広島県庁舎も近くにある。周辺には緑豊かな公園や歴史スポットもあり、訪れる人々にとって魅力的な場所である。



流れる flow
川の流れるように、光、風、音、熱、水の流れを止まらせないようにする。人の行動も止まらせないようにする。人の行動も止まらせないようにする。人の行動も止まらせないようにする。

集まる gather
集まるという行為は、人々の集まることを促す。集まるという行為は、人々の集まることを促す。集まるという行為は、人々の集まることを促す。

奥行き depth
奥行きを深めることで、空間の奥行きを深める。奥行きを深めることで、空間の奥行きを深める。奥行きを深めることで、空間の奥行きを深める。

広げる broaden
広げるという行為は、空間を広げる。広げるという行為は、空間を広げる。広げるという行為は、空間を広げる。

Stady
安定した空間を創出する。安定した空間を創出する。安定した空間を創出する。



Furniture ~Arc Chair~
アーチ型の椅子をデザインする。アーチ型の椅子をデザインする。アーチ型の椅子をデザインする。



Concept
光の流れるように、空間を創出する。光の流れるように、空間を創出する。光の流れるように、空間を創出する。

Diagram
光の流れるように、空間を創出する。光の流れるように、空間を創出する。光の流れるように、空間を創出する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。



Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。



Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。



Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。

Art
アート作品を展示する。アート作品を展示する。アート作品を展示する。



面 OMO-KAGE 影

友藤 駿 / Shun TOMOFUJI



面 OMO-KAGE 影

◆Concept

近年、都市化が進んでいる中で用ひのほりに設置する敷地でアパートに囲まれた集合住宅は快適といえるものがある。こまかな敷地には自然を取り込み、受け込んだファサードが必要。

新しいファサード、システムを思い描くのではなく、過去の建築様式を現代にフィードバックさせ、建築に高みと込む。

それより過去の建築様式の間隙が深まることで、現代のシステムと過去のシステムを併用することで新たな建築様式を生み出すことが可能になる。

◆Location

敷地 広島県広島市東区 豊後 広島県広島市東区

豊後は広島県広島市東区、第三次世界大戦、終戦を経てシステム化(旧町区画)とし、戦後の都市開発により復興を受けた地区である。

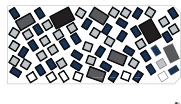
戦後、行く当てのない多くの人々が身を寄せ合うようにして暮らしていたこの地区は、都市開発によって官公庁、幼稚園、小学校、児童館、単立保育園、図書館などを生み出した多くの公共施設が建設されていった。

西側に大田川が広がるこの場所は地形にも恵まれ、高木に長く続く河川敷と両側に位置する中央公園によって、都心にあっても自然と触れ合うことができる豊かなゾナに囲まれた住みやすい地区となっている。



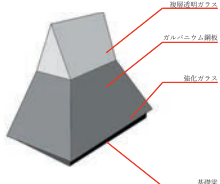
◆Layout Plan

西側の低層の建物の敷地内に入っており、どの建物も天窓から採光を確保し高を削いでいる。また、入り口はどの建物も敷地内へはよう凹設し、プライベートを確保している。

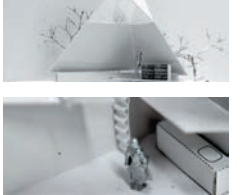


- 単身赴任や1人暮らしの学生向け住宅。
- 老夫婦向けの住宅。
- 2~3人の家族向けの住宅。
- 住人同士が交流できる場。

◆Material



◆Inspection



◆Diagram

01. 高天井の天窓から採光することで部屋を明るくする。

02. 地下に埋めることによって、夏は涼しく冬は暖かい室内環境を確保する。

03. 配置されている全ての住戸にレベルの異なるテラスの空間を、住民はそこで毎々の生活を行う。

04. 地下に掘削部を設けることで通風も可能。

Type A

Type B

Type D

◇より広がる夜の風景

◇より取り込む昼の風景

◆Layout & Floor Plan

GL-1000 Floor Plan S-1/1000

GL-2000 Floor Plan S-1/1000

- A. 単身赴任や1人暮らし向けの住宅。**
 - ・ワンルームから、LDKまで多様な単体住宅を幅広く対応。
 - ・メゾネットタイプのフラットタイプの2+1プラン。
 - ・ワンタラーも対応。
- B. 老夫婦向けの住宅。**
 - ・バリアフリー住宅。
 - ・採光を充分取り出す設計。
 - ・階段の付、天井のしすいワイドスライスを設置。
 - ・上り下りの段差が高い。
- C. 2~3人の家族向けの住宅。**
 - ・LDKの広い空間。
 - ・地下に広い空間を併用することで近所への騒音問題などを配慮。
 - ・吹き抜けにより高い天井空間が生まれる。
- D. 住人同士が交流できる場。**
 - ・メゾネットやフラット。
 - ・8m×18mの144平米の大空間で体育や、レクリエーションなどの憩いも可能。
 - ・平層でも人も行き来しやすいよう上り下りの段差が低い。

◆Elevation



◆Section





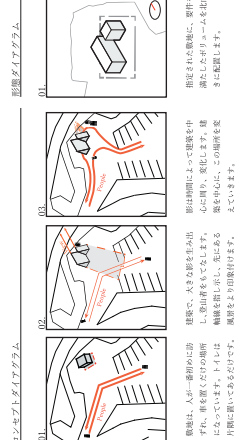
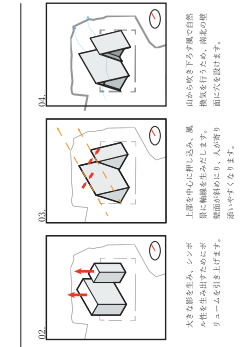
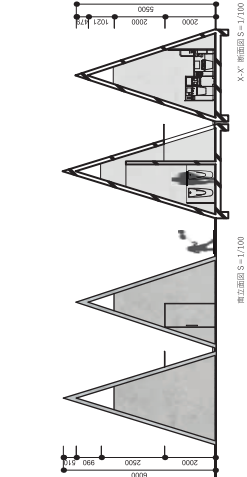
ひろしま建築学生チャレンジコンペ 2018 入選

絶景展望台に「あって良かった」以上のトイレを。

あたたかい陰のなかに

今江 周作 / Shusaku IMAE 田中 航平 / Kohei TANAKA

049



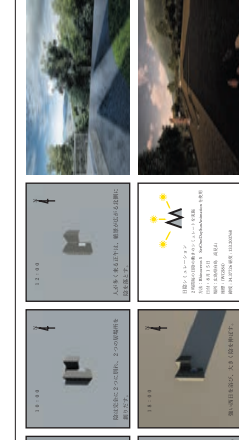
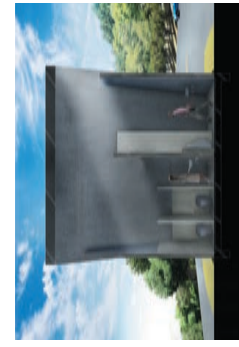
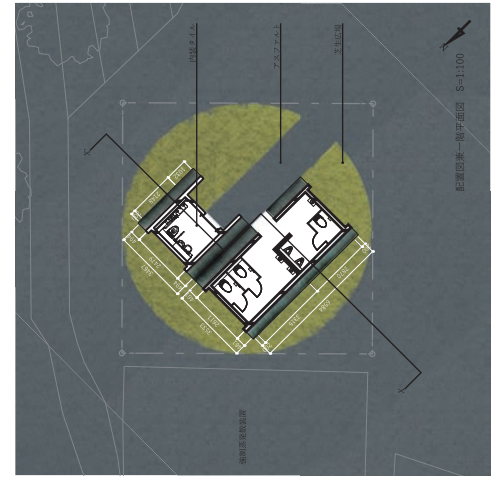
あたたかい陰のなかに

庭をそとに作ります。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。



あたたかい陰のなかに

庭をそとに作ります。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。

庭は歩いてきた人々を導き、人々を待てる場所へと庭を導きます。

See You Next Year

2018年度 近畿大学工学部建築学科作品集

令和元年(2019年)10月 第一刷

発行 近畿大学工学部建築学科

〒739-2116 広島県東広島市高屋うめの辺1

tel 082-434-7000 fax 082-434-7011

<http://www.archi.hiro.kindai.ac.jp/>

編集 近畿大学工学部建築学科

印刷・製本 三原プリント株式会社

本書の全部または一部の複写・複製等を禁じます。

Copyright © Kindai University, All Rights Reserved, 2019

